



[七瀬タクミ]

「よっ！ やってる？」

軽いノリのタクミが店に訪れて快活に笑う。



閉店後、明日の仕込みを高速で終わらせた矢先だった。



こんもりと積み上げられた餃子を眺めながら、ホント器用だよなあ、とタクミがまた笑った。



[小鳥遊レイ]

「暴力団組員って暇なのか？」



単純な疑問を投げる。タクミはぱちくりと目を丸めるも、俺に悪気がないことを読み取ったのだろう。



視線を中空に彷徨わせたのち、あっさり答えを戻してきた。



【七瀬タクミ】

「んー、暇じゃないよ。夜の街のご近所付き合い」







タクミがケラケラと声をあげて笑った。よく笑う奴だということはここ数日で知ったことだ。



タクミは毎日この店に顔を見せる。そして暫く歓談したのち、夜の街に戻るのが常だった。





暴力団の世界には当然疎いが、テレビなどの雑な知識で夜の店との繋がりが深い印象はある。



実際にタクミの役割は風俗嬢の管理らしく、聞いたときは
タクミの印象とはそぐわないなどと思ったものだ。



【七瀬タクミ】

「レイって明日バイト最終日だっけ、これからどうするの」



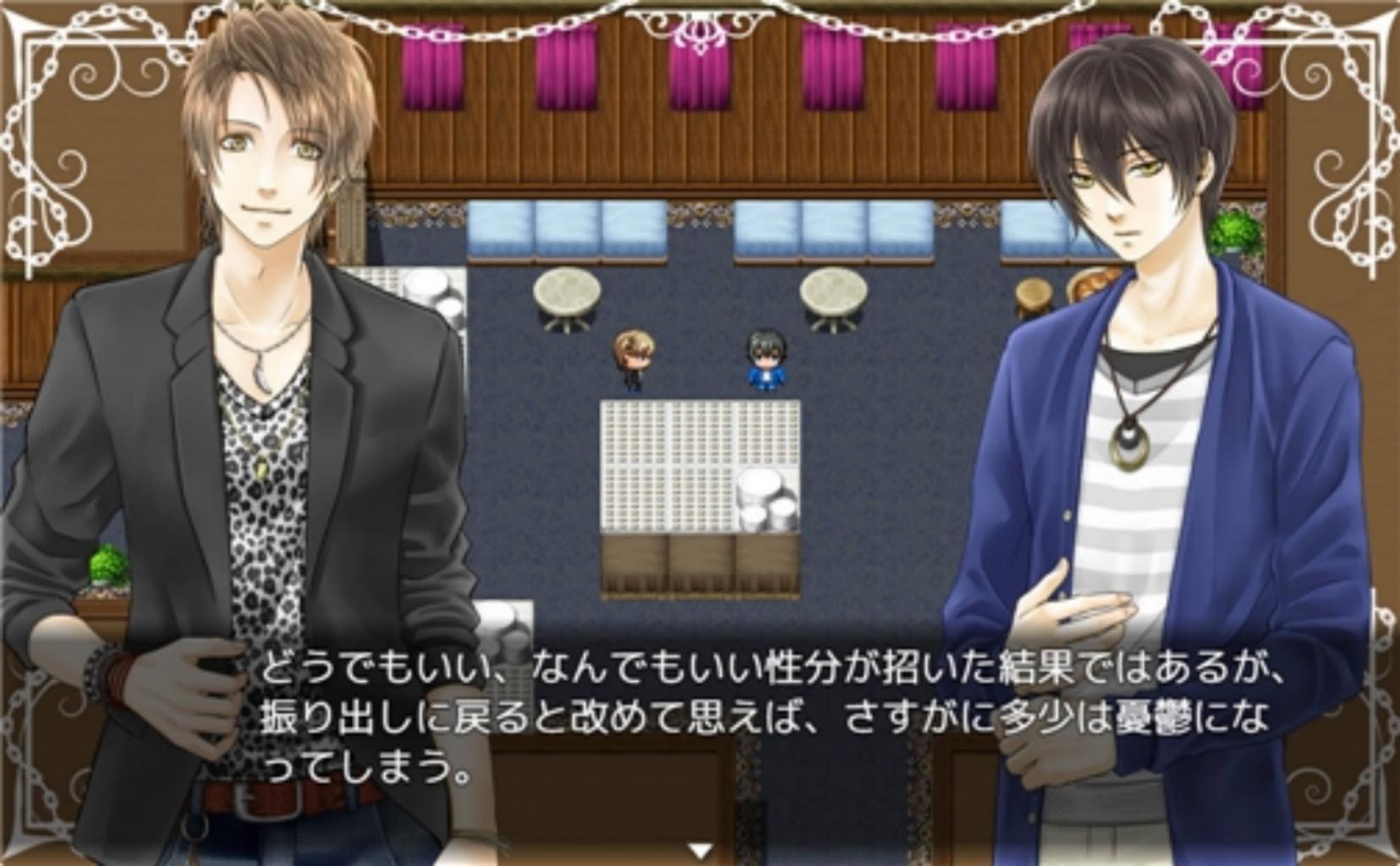
[小鳥遊レイ]
「知らない」





気付いてたけどレイって生き方が雑だよね、とタクミに呆
れられる。

そう、結局この期間中に身の振り方を考えることはついで
なかった。



どうでもいい、なんでもいい性分が招いた結果ではあるが、振り出しに戻ると改めて思えば、さすがに多少は憂鬱になつてしまふ。



【七瀬タクミ】

「あのさ、暗～い顔するぐらいいならちゃんと考へなよ？」



[小鳥遊レイ]

「すまない……どうにも面倒で」



【七瀬タクミ】

「はあ、そういう奴だって段々わかってきたけどさあ」



大きな溜め息を吐いたタクミが後ろ頭を掻いたのち、何か
を思いついたようにぱっと顔を輝かせた。



【七瀬タクミ】

「じゃあさ！ オレの家でしばらく住まない？」

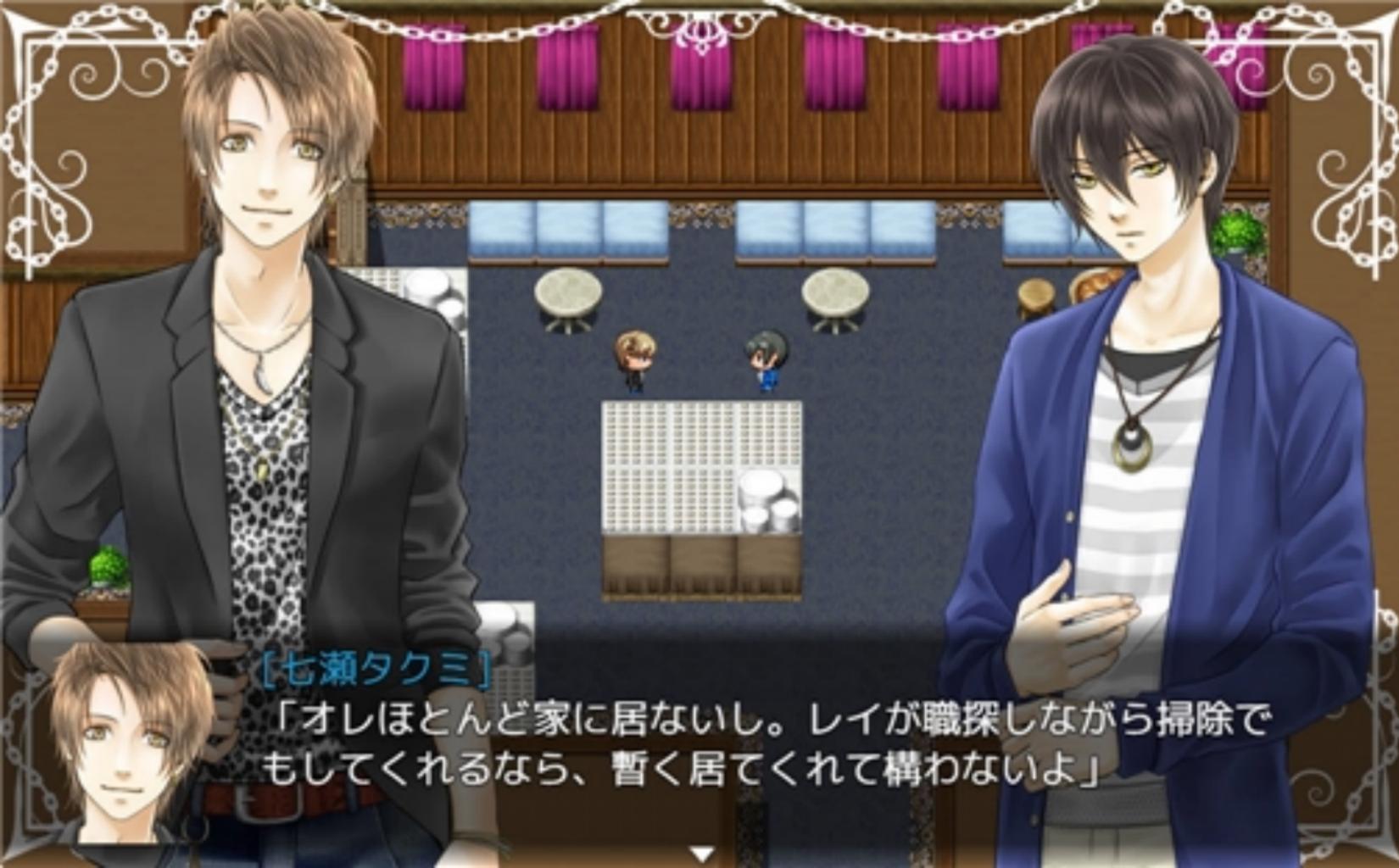


[小鳥遊レイ]
「え」

唐突な提案に大きな声があがる。



驚いた様子の俺を見て楽しげに目を瞬かせたタクミが、そのまま先を続けた。



【七瀬タクミ】

「オレほんと家に居ないし。レイが職探しながら掃除で
もしてくれるなら、暫く居てくれて構わないよ」



[小鳥遊レイ]
「掃除だけ？」



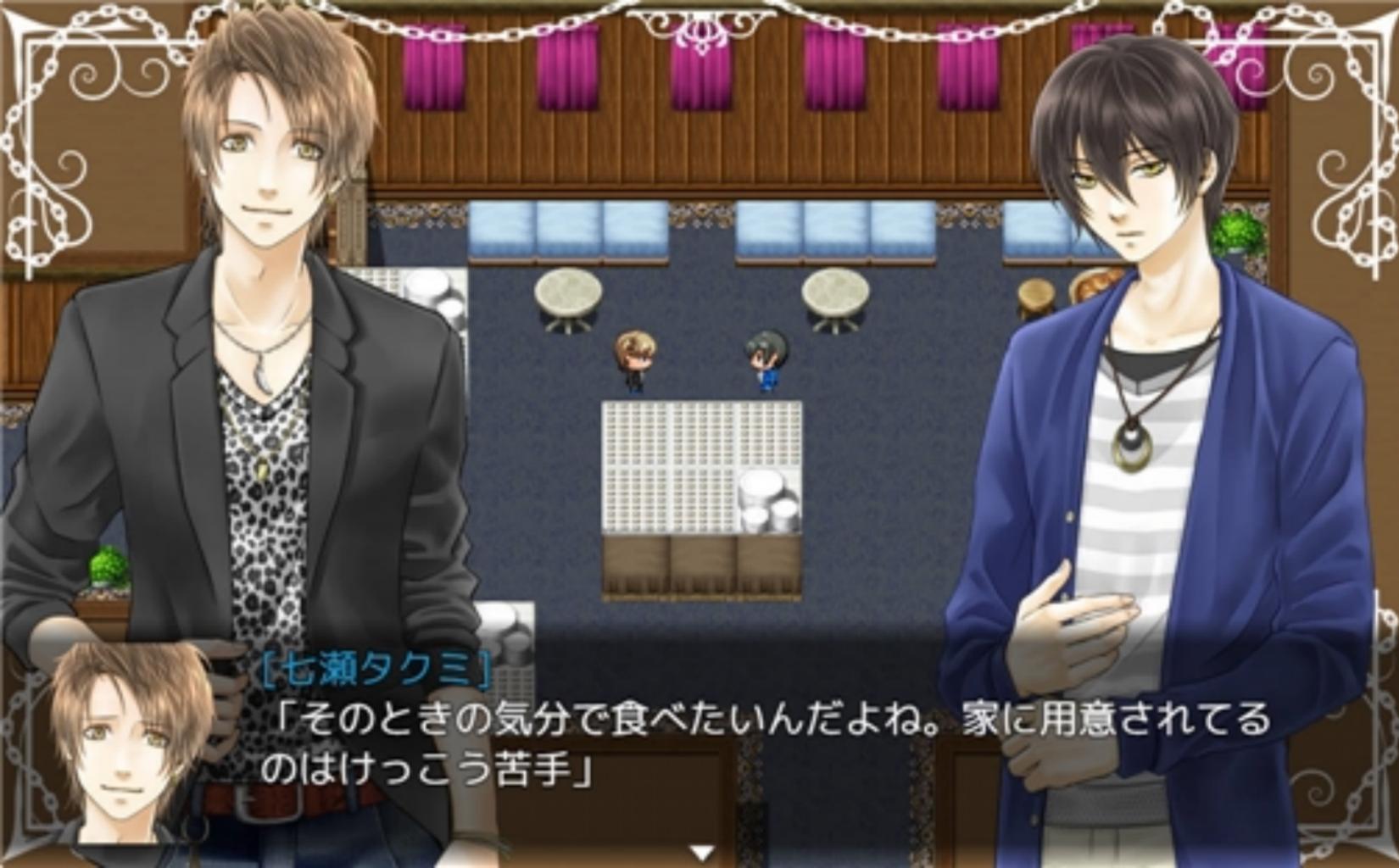
【七瀬タクミ】

「そ。ご飯とかは要らないんだ」



[小鳥遊レイ]

「そうなのか」



【七瀬タクミ】

「そのときの気分で食べたいんだよね。家に用意されてるのはけっこう苦手」



少し顔に陰りを見せたタクミが、けれどすぐに明るい笑顔に戻って俺の手を取る。



【七瀬タクミ】

「レイは寝る場所ができる。オレは部屋がキレイになる！
ね、良くない？」



[小鳥遊レイ]

「良くない、って……まだ会ってからそんなに」



【七瀬タクミ】

「オレとしては何日も会ってたら、もうトモダチ」



にいと人懐こい笑みを向けられる。親しげに距離を詰められることには不慣れでどきりと心臓が跳ねた。

思わず戸惑っていれば、タクミが畳み掛けるように続けてくる。



【七瀬タクミ】

「いーじゃん。オレだってメリットあんの！」





【七瀬タクミ】
「そ！」



あまりにも明快な提案に、気持ちがぐらぐらと傾く。



もとより強く拒む理由もなく、当所もなく彷徨うよりいらかどころか相当マシなのだ。

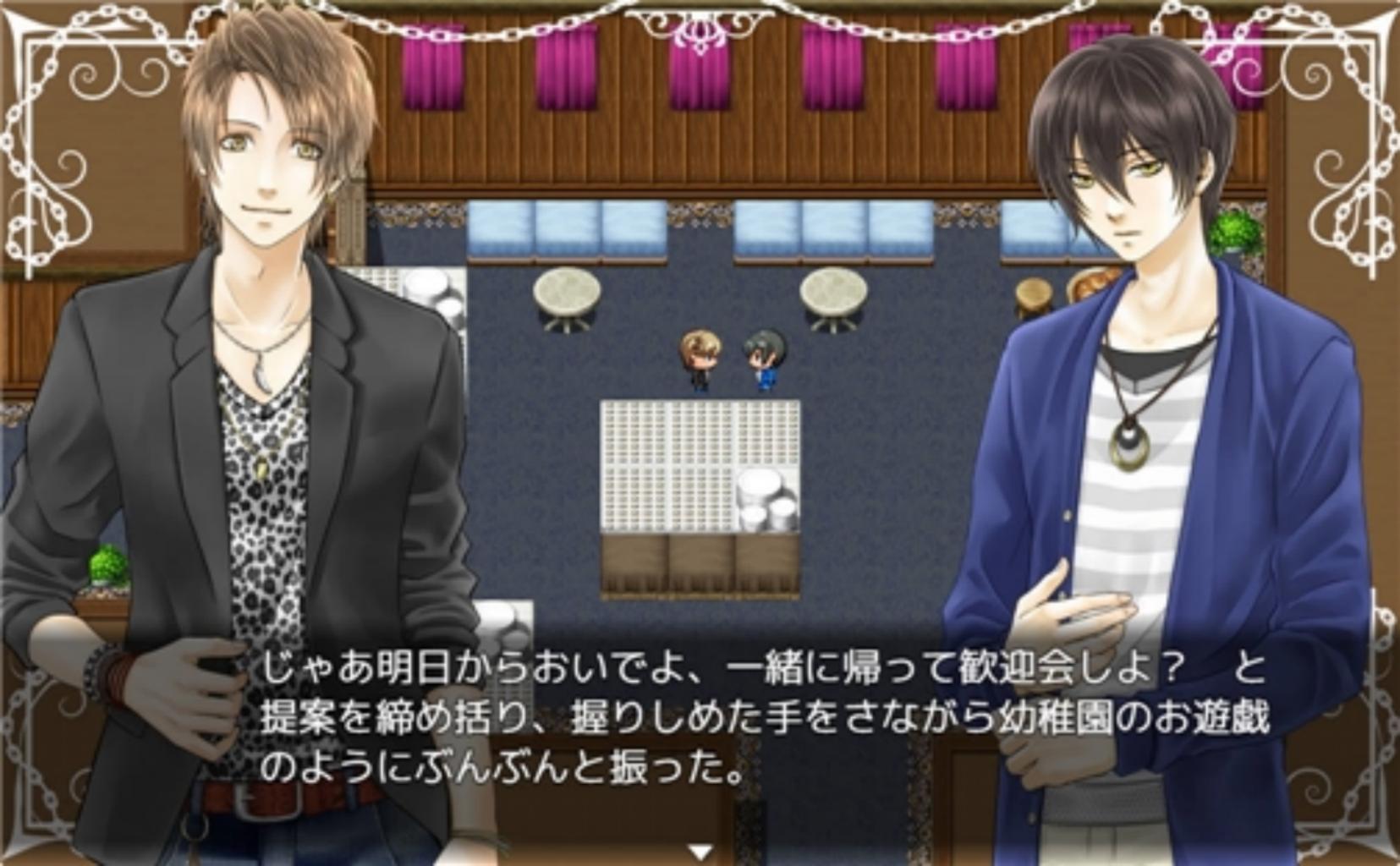




ほとんど肯定を示す問いを投げる。



それを聞いたタクミが嬉しそうに目元を緩めた。



じゃあ明日からおいでよ、一緒に帰って歓迎会しよ？ と
提案を締め括り、握りしめた手をさながら幼稚園のお遊戯
のようにぶんぶんと振った。

耽美な鎖くさり





[小鳥遊レイ]

「い、いいのか……？」





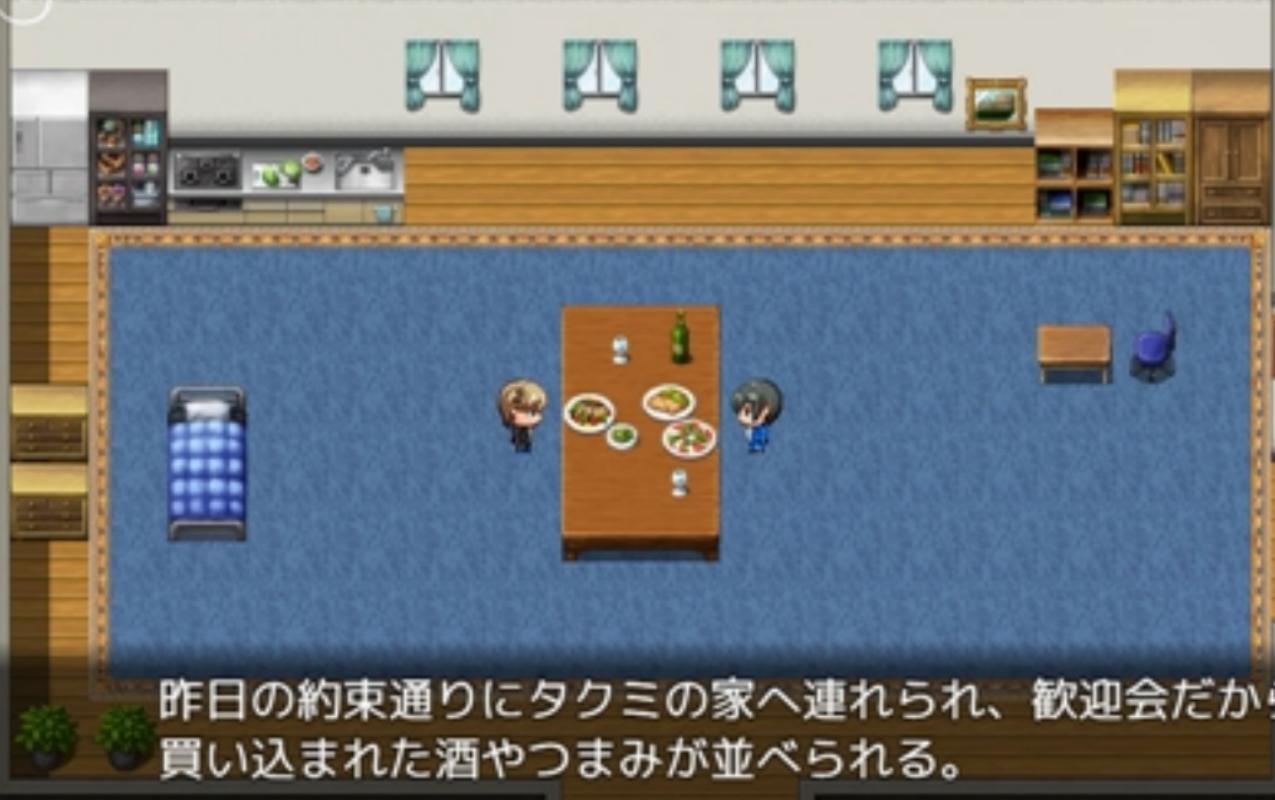
[七瀬タクミ]

「いーの！ ほらほら！」





人の金で呑む酒に少し戸惑う。



昨日の約束通りにタクミの家へ連れられ、歓迎会だからと
買い込まれた酒やつまみが並べられる。



職場関係はおろか友人とすら呑んだことのない俺を余所に、
タクミはにっこにっこチューハイを呷っていた。



【七瀬タクミ】

「レイってさあ、人と呑むの苦手？」



[小鳥遊レイ]
「え」



【七瀬タクミ】

「なんか落ち着かなさそう。楽しくやろうよ！」

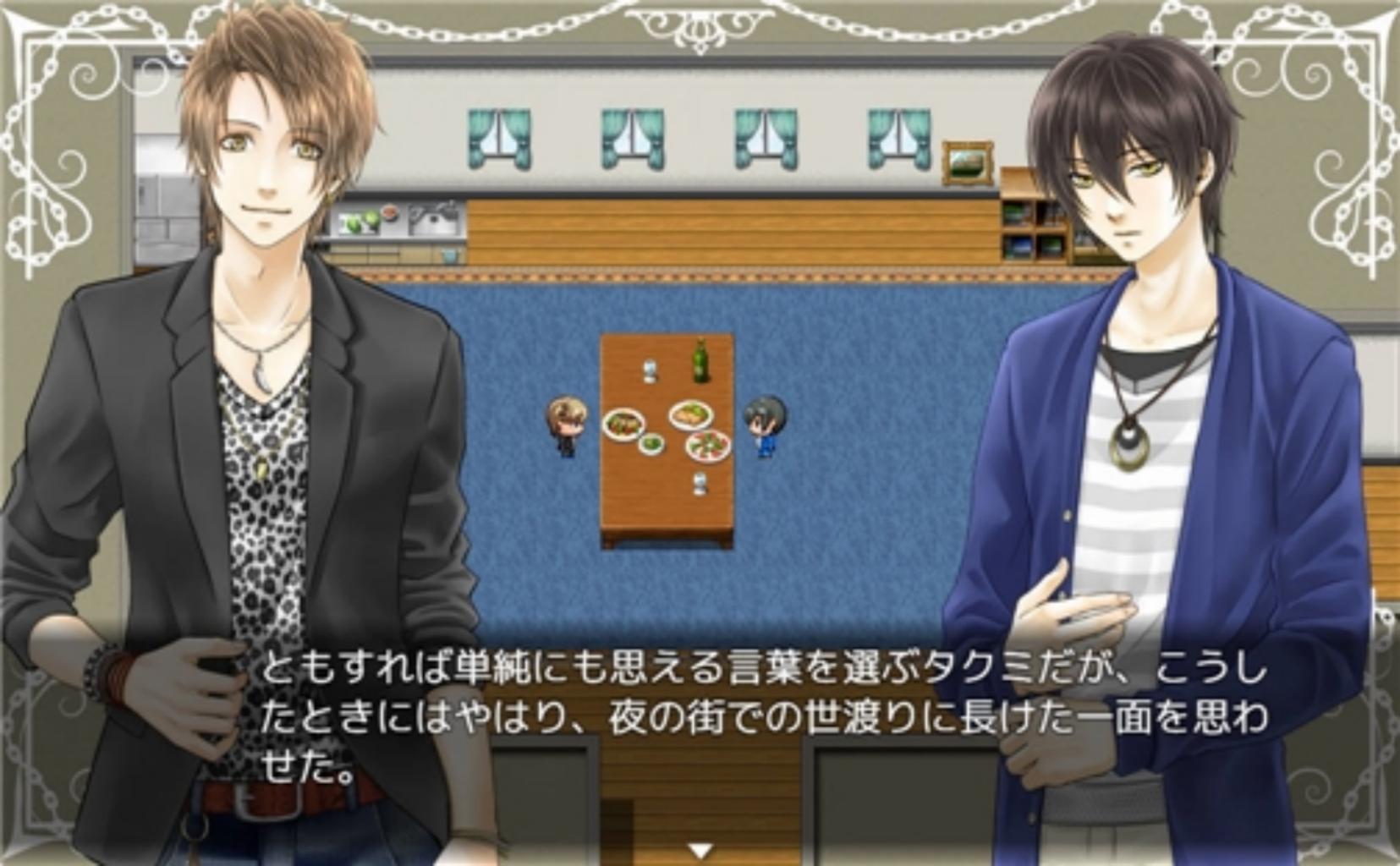


[小鳥遊レイ]

「あ、ああ……」



タクミの、軽い調子であるのに機微を見抜いてくる物言いには時折どきりとさせられる。



ともすれば単純にも思える言葉を選ぶタクミだが、こうしたときにはやはり、夜の街での世渡りに長けた一面を思わせた。



[小鳥遊レイ]

「それにしても」



緩慢に部屋を見渡す。



[小鳥遊レイ]

「全然散らかってないじゃないか」



【七瀬タクミ】

「え？ そう？」



[小鳥遊レイ]

「どこを掃除すればいいんだ」



【七瀬タクミ】

「んー、床とか？」



[小鳥遊レイ]

「綺麗好きなのか？」



【七瀬タクミ】
「ん、フツー」



[小鳥遊レイ]

「なら、普通程度に頑張る」



【七瀬タクミ】

「あははっ、頑張って！」



俺らしからぬ軽妙なやりとりが続いた。



これが酒の力なのかと素直な感嘆を内心で零しながら、くらくらと酩酊に沈んでいく。



そういえば呑みの経験がなく、自分の酒量を把握していなかつた拙さに思い当たった。



【七瀬タクミ】

「え！ レイもう酔ったの？」



[小鳥遊レイ]

「そうみたいだ」



【七瀬タクミ】

「うっわ、めっちゃ顔トロンとしてるのに、めっちゃハキハキしてる！」



面白いと腹を抱えて転げ回るタクミを緩慢に眺める。



他人が自分のことで笑うのも悪くないんだな、などと普段なら考えないことが頭を過った。



タクミの調子に釣られて俺も床に転がり、大きな声をあげて笑ってみる。



[小鳥遊レイ]

「床、綺麗じゃないか」



【七瀬タクミ】
「ん、 そう？」



[小鳥遊レイ]

「ああ。掃除の出番が少なそうだ」



【七瀬タクミ】

「それなら別に、しなくていいし」



[小鳥遊レイ]

「いや、でも世話になるからには何か、こう」



【七瀬タクミ】

「じゃあさ、レイ？」



蕩ける視界に、やはり酩酊を孕んだ表情のタクミがにっこりと笑うのが映った。



【七瀬タクミ】

「こーいうときホラ、よくあるじゃん」



[小鳥遊レイ]
「え」



【七瀬タクミ】

「身体で払う、ってシチュエーション」



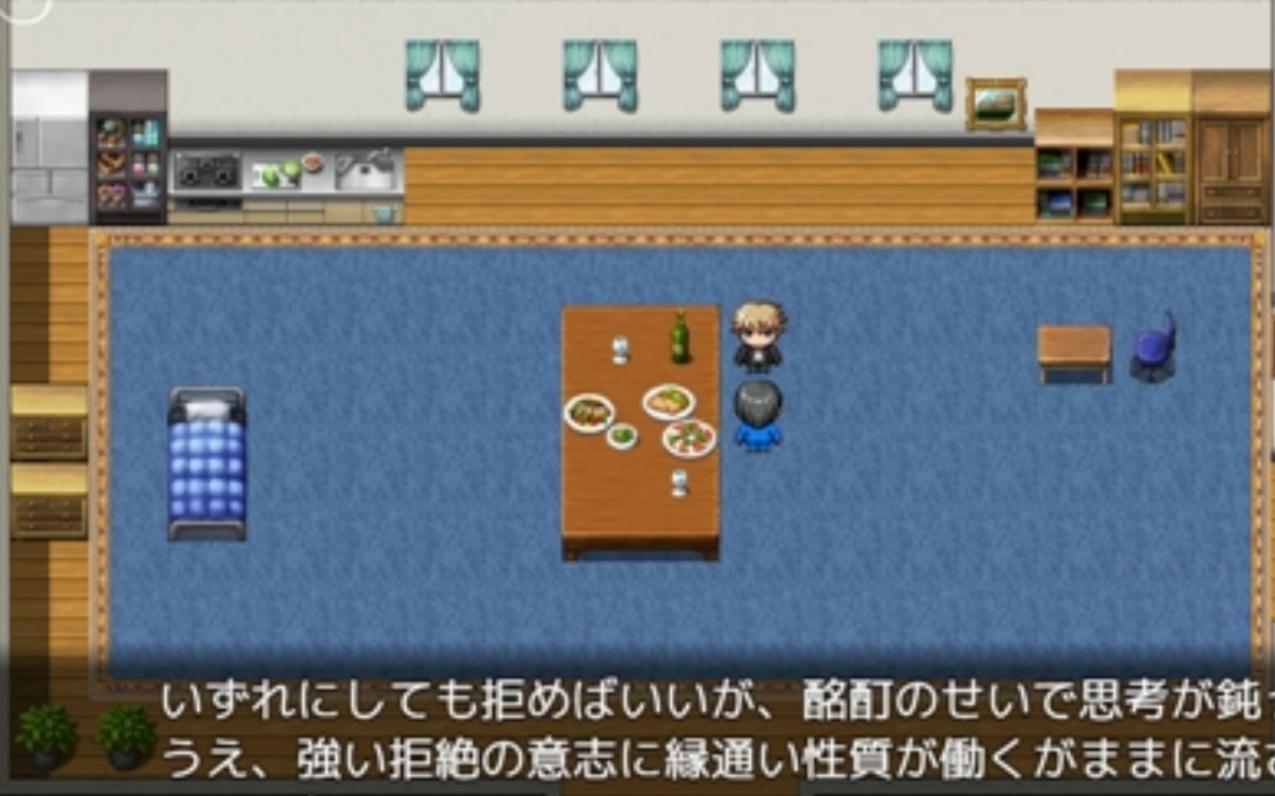
[小鳥遊レイ]

「は？ っ、ン」





唇を塞がれる。ふにふにと啄まれて笑い声を上げられ、本気なのか冗談なのか全く掴めない。



いずれにしても拒めばいいが、酩酊のせいで思考が鈍ったうえ、強い拒絶の意志に縁通り性質が働くがままに流されていった。



[小鳥遊レイ]

「つ、ふ……ちょ、つ、ア……」





[七瀬タクミ]

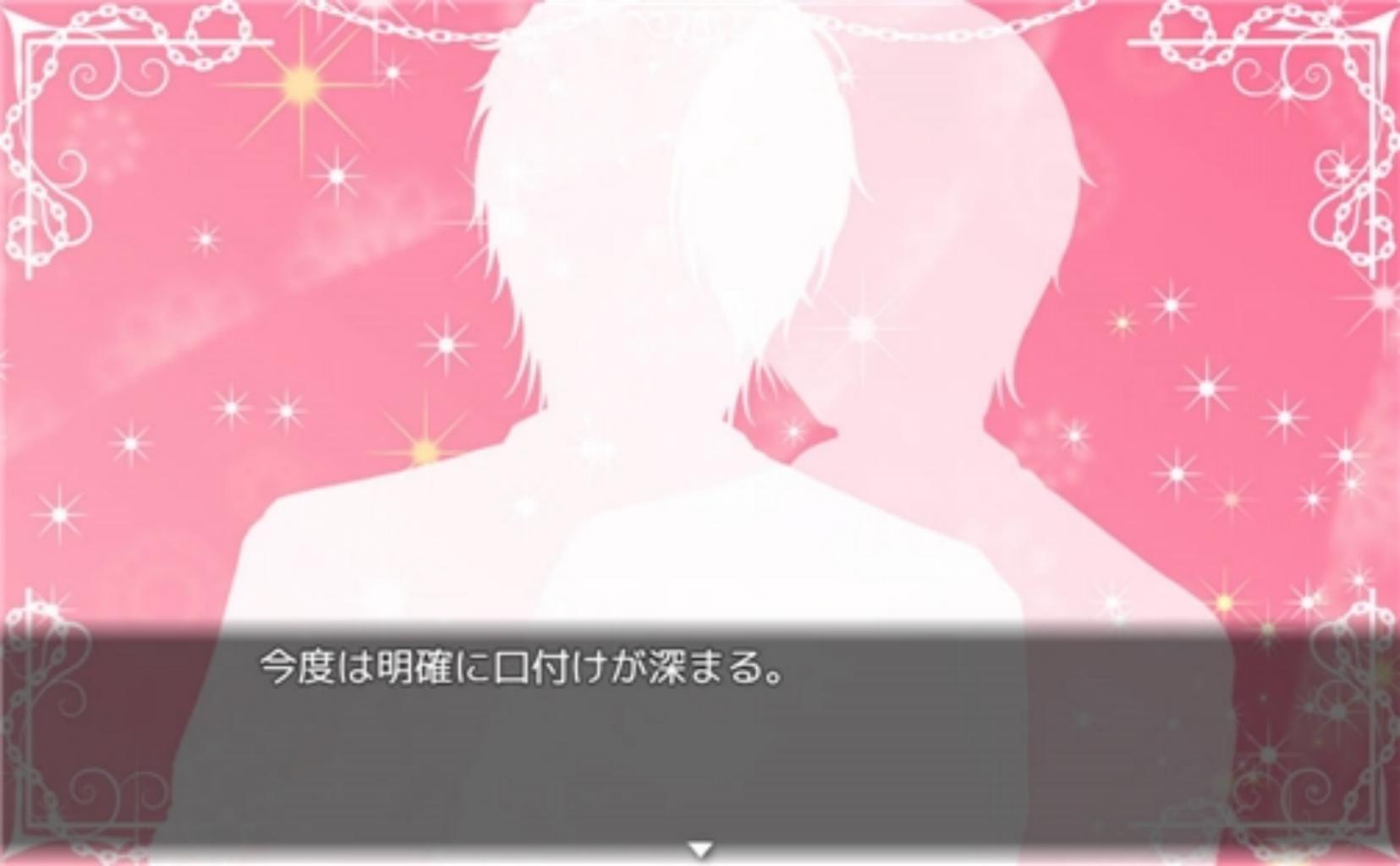
「レイの反応、面白い」



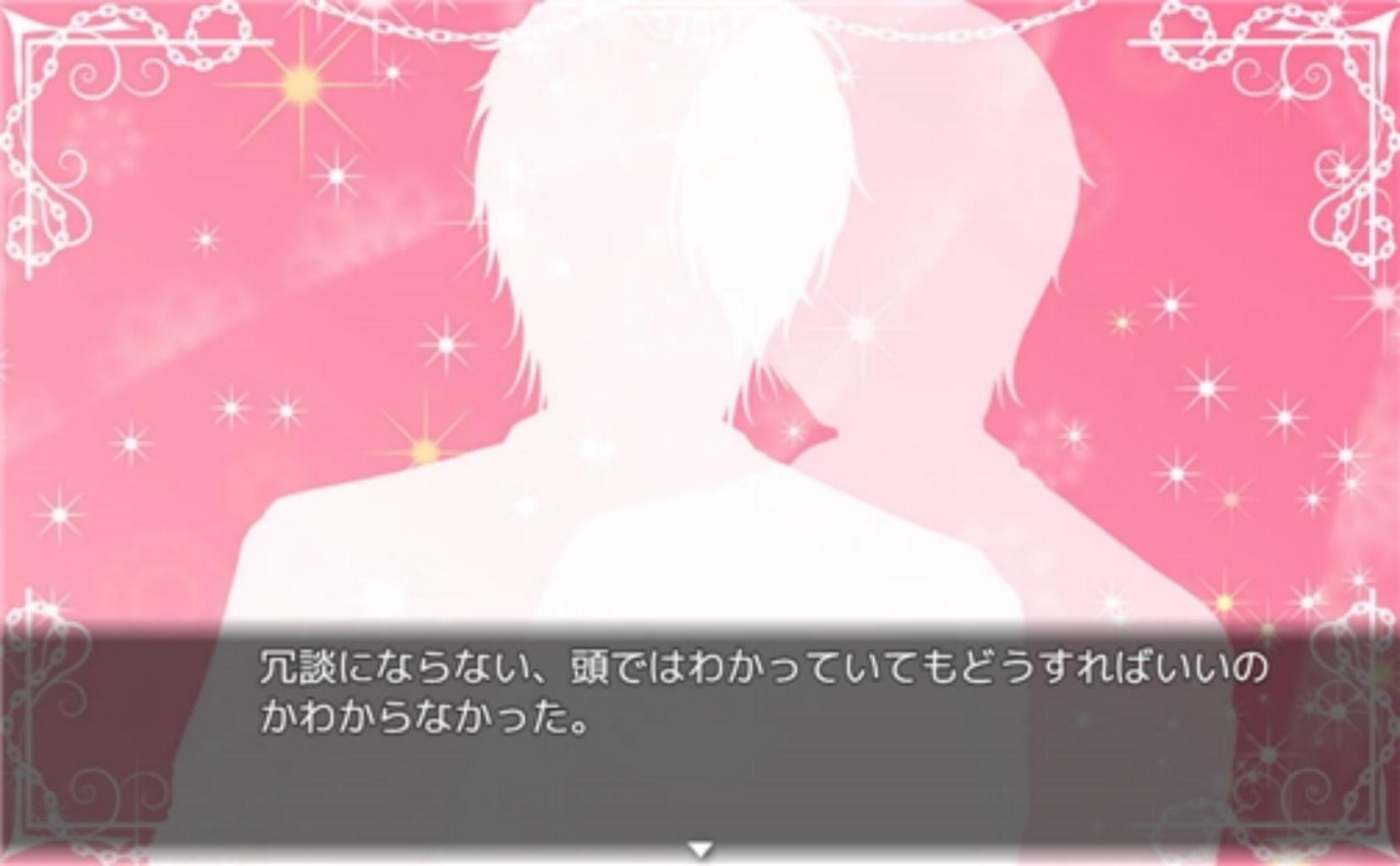


[小鳥遊レイ]
「っん！」

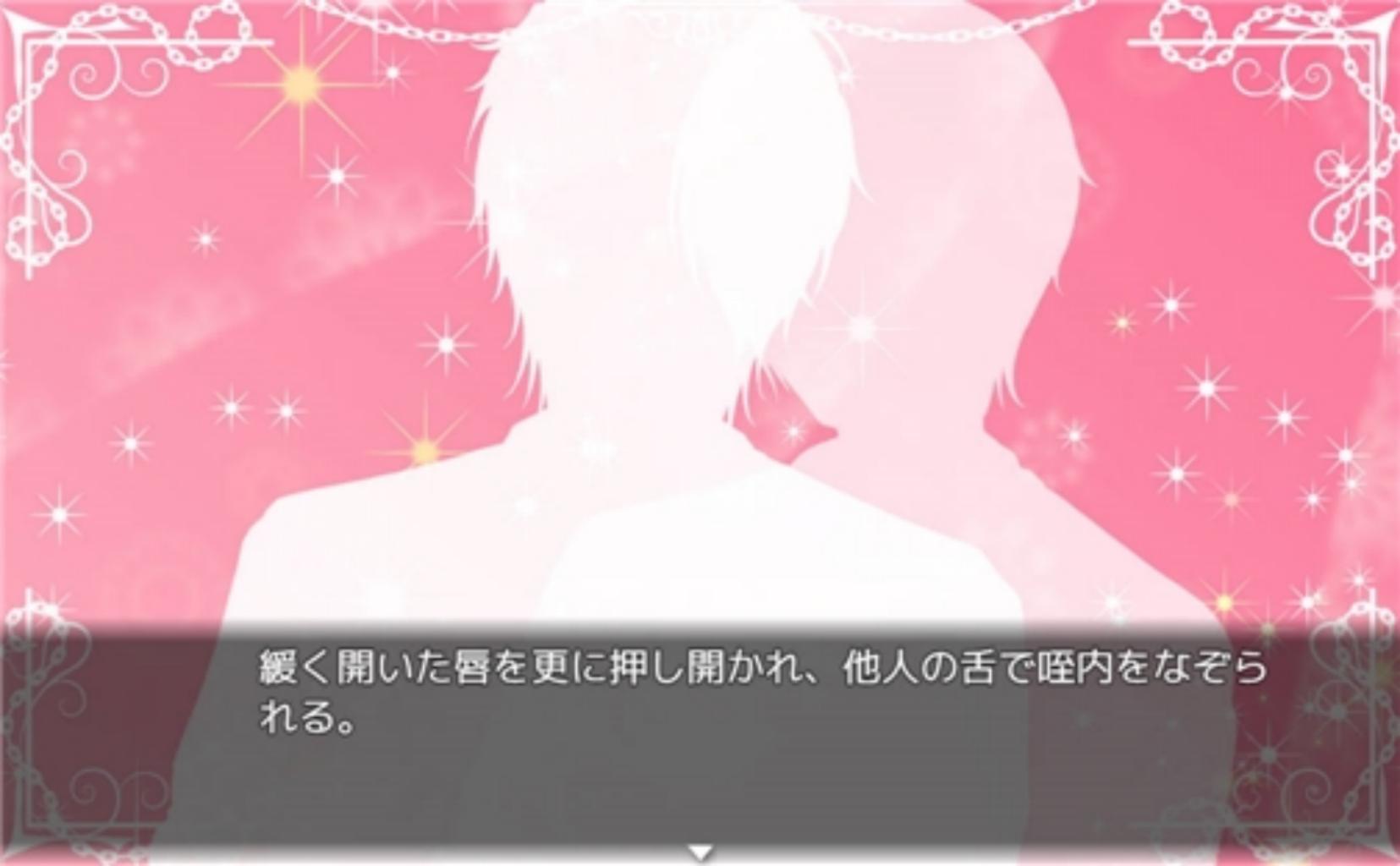




今度は明確に口付けが深まる。



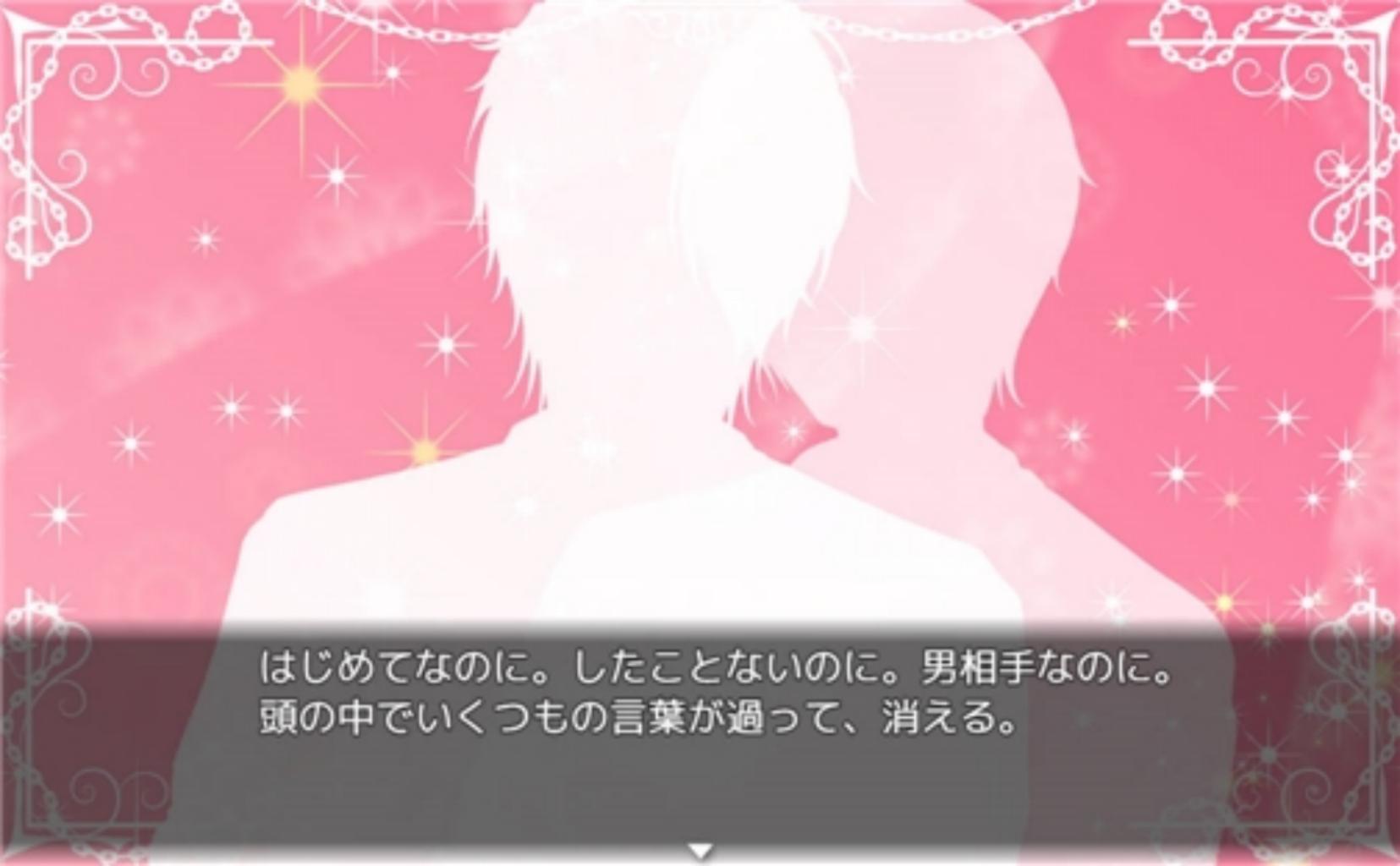
冗談にならない、頭ではわかっていてもどうすればいいのかわからなかった。



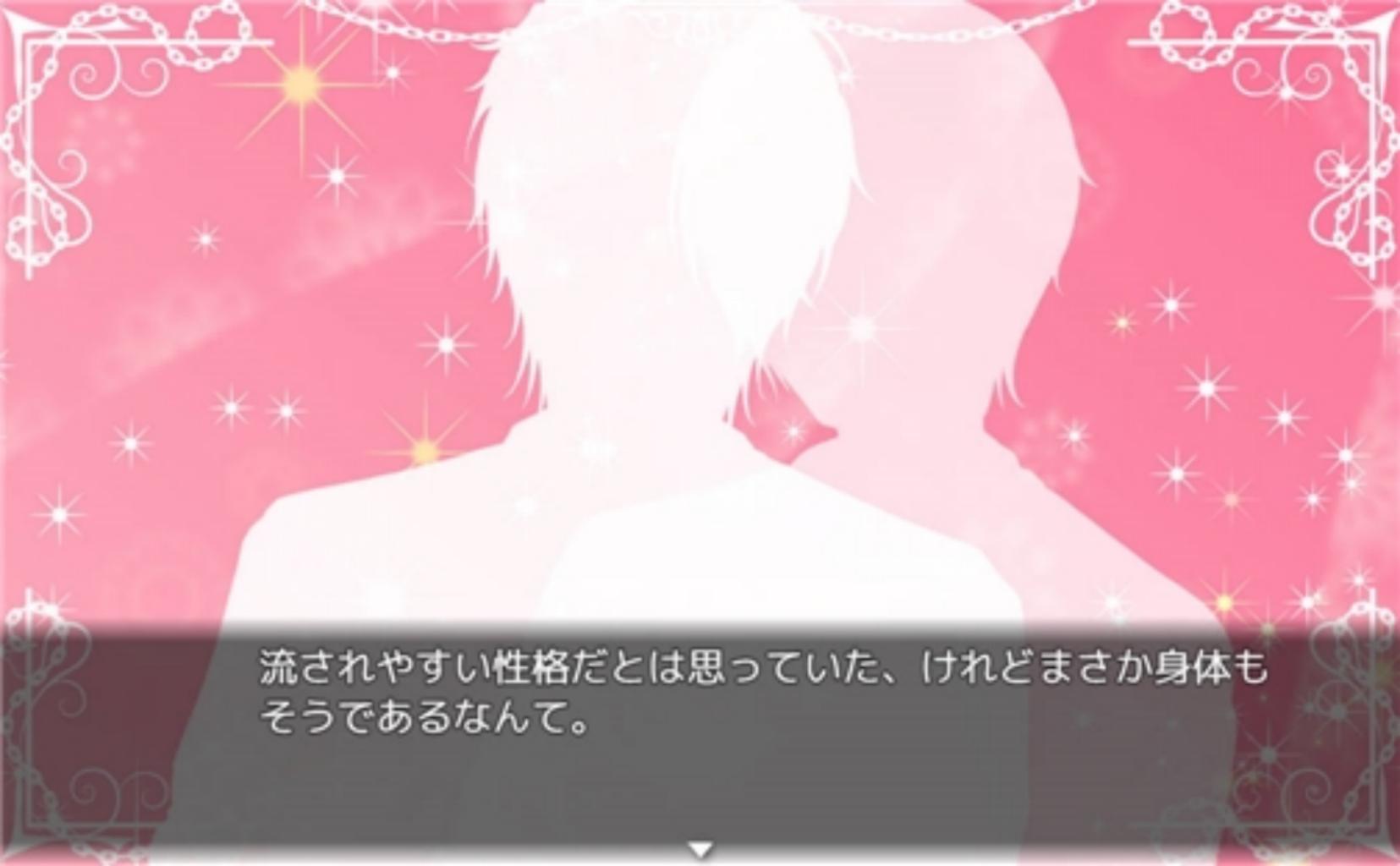
緩く開いた唇を更に押し開かれ、他人の舌で咥内をなぞられる。



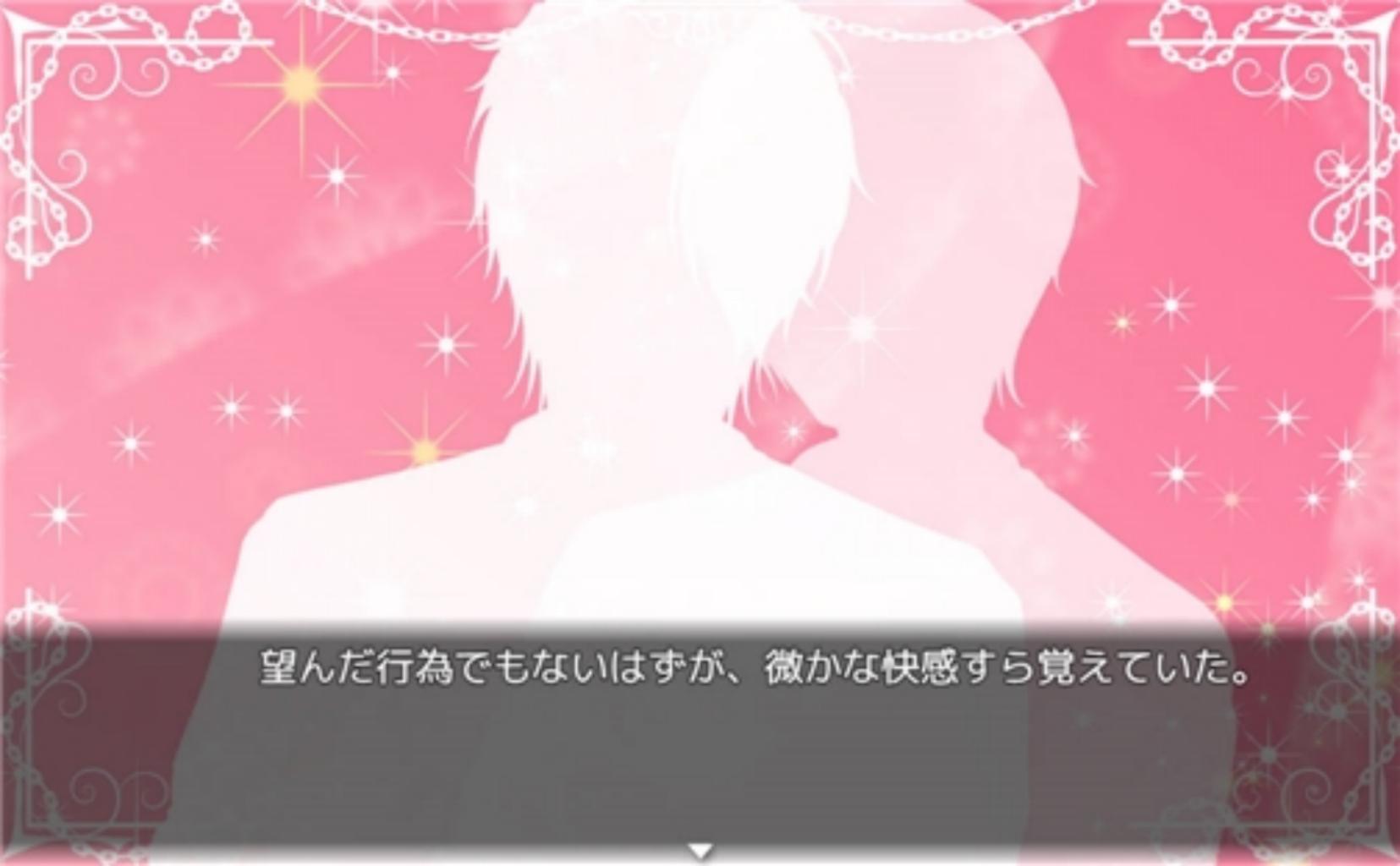
【小鳥遊レイ】
「ん、う……」



はじめてなのに。したことないのに。男相手なのに。
頭の中でいくつもの言葉が過って、消える。



流されやすい性格だとは思っていた、けれどまさか身体も
そうであるなんて。



望んだ行為でもないはずが、微かな快感すら覚えていた。



[七瀬タクミ]

「レイごめん、ちょっとふざけすぎた？」





[小鳥遊レイ]
「……う」





先程までの熱っぽさとは一転、唇を離したタクミが眉を下
げて問うてくる。



ふざけすぎだ、嫌だった、悪くなかった。どの言葉も俺の中に存在した。

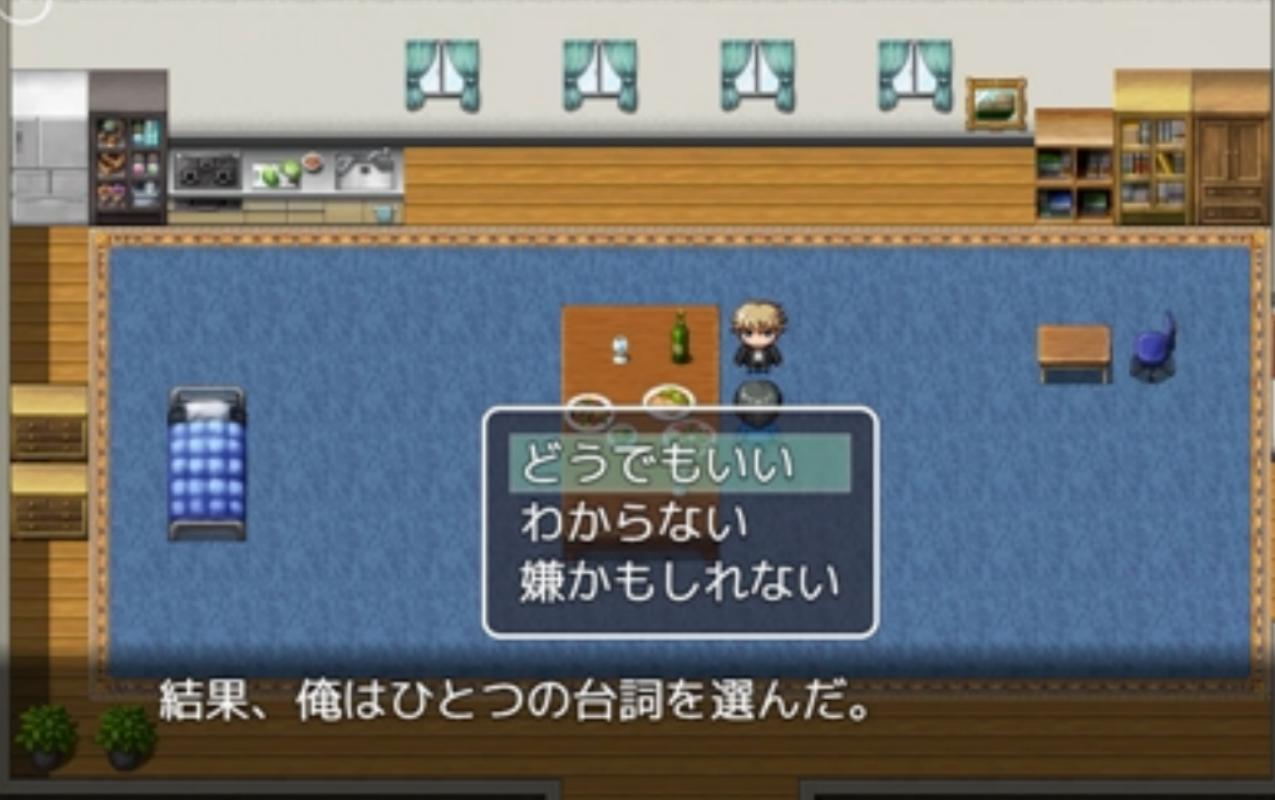


けれど明確に言葉にしたい感情は何一つ見当たらない。



[小鳥遊レイ]
「.....」







[小鳥遊レイ]

「……どうでも、いい」



タクミが目を瞠り、驚きの視線を向けてくる。



まさかこの局面ですら悪い口癖が飛び出すとは思わなかつたのだろうか。



けれど俺が思ったよりも早くタクミがその表情を緩め、初めて見せる類の笑みを深めた。



[七瀬タクミ]

「いーの？ そゆこと言うと、ワルイコトされちゃうよ」





[小鳥遊レイ]

「するの、か？」





[七瀬タクミ]
「どうしようかな」





くすくすと、子供のような笑い声をあげたタクミが俺を床へと組み敷く。



どこまでが俺の限界かを探られているのだろうか。



けれど俺だって、どこまでされれば嫌なのかなんてわからなかった。



言葉を発さずにいると、タクミが今一度顔を寄ってきて低い声音で続けた。



[七瀬タクミ]

「じゃあ、レイが……イヤって言うまで試そっか」





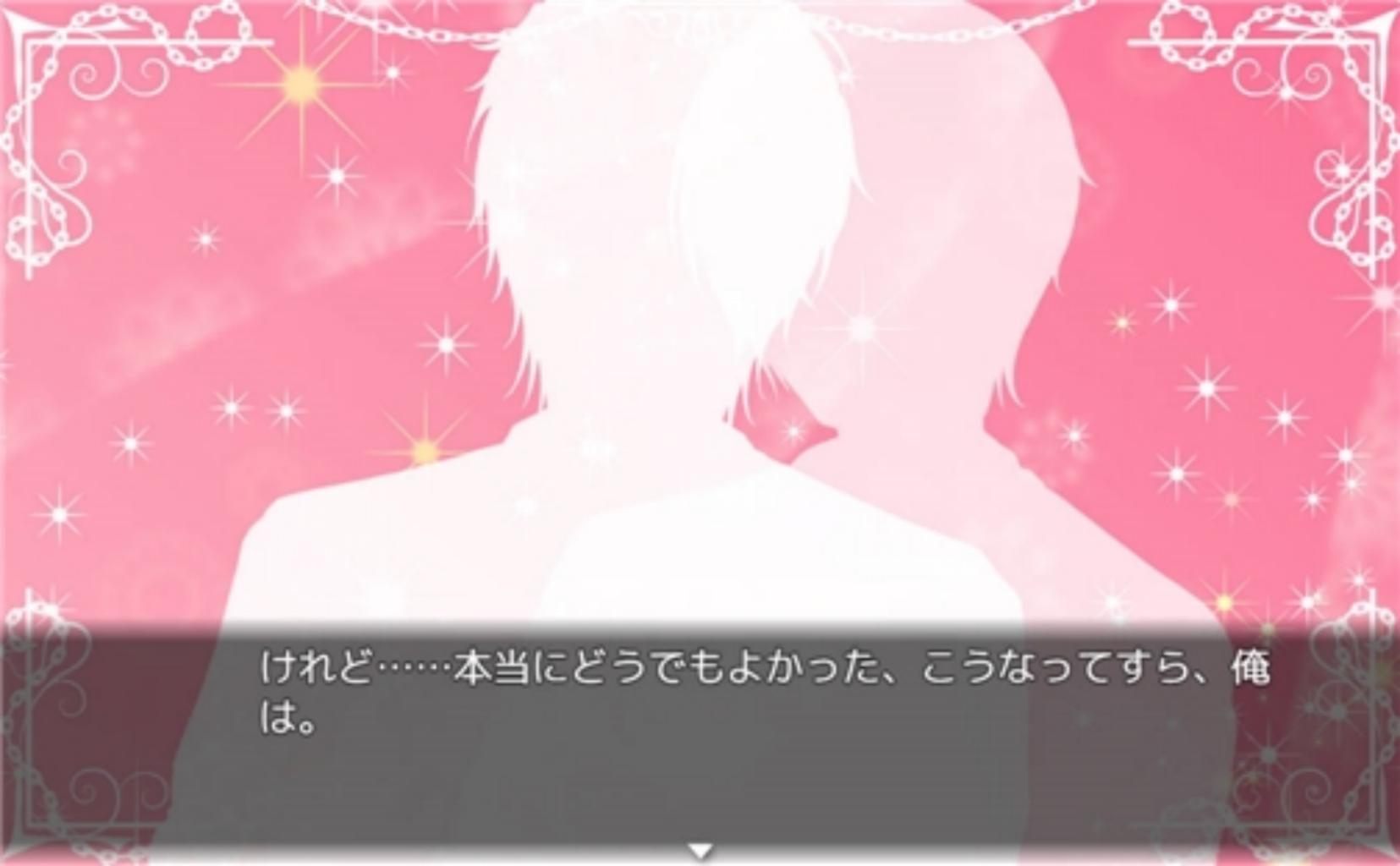
[小鳥遊レイ]
「ためす？」





[七瀬タクミ]
「そ」

再び唇を塞がれた。同時にタクミの手が俺の服を寬げて胸元へ滑り、明確な性行為への意志を示される。

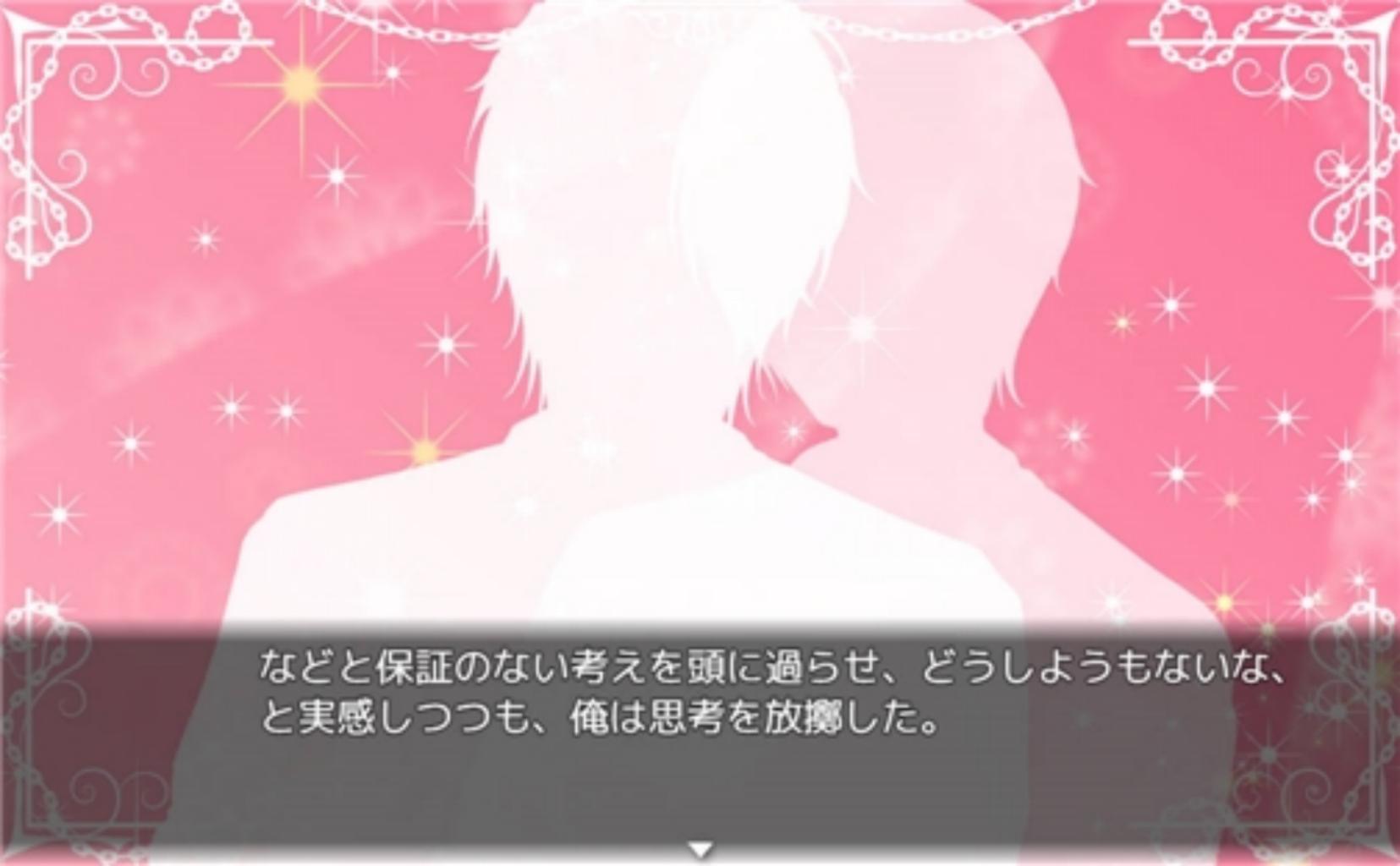


けれど……本当にどうでもよかったです、こうなってすら、俺
は。



【小鳥遊レイ】

(このまま行為を受ければ、どこで嫌と思うのかわかるかも知れないな)



などと保証のない考えを頭に過らせ、どうしようもないな、
と実感しつつも、俺は思考を放擲した。



耽美な鎖

くさり



[小鳥遊レイ]

「は……つ、 あ、 ……あ」



聴くに堪えない声が室内に響く。



こんな声が出るなんて。こんな状況になるなんて。気付け
ば服はほぼ取り払われていた。



俺の後孔を弄ぶタクミの指が抜き差しされるたび、
ぷちゅ
ぷちゅと軽い水音が鼓膜に届いた。



[七瀬タクミ]

「ローション冷たくない？ 風俗店でサンプル貰ったんだ
けど、温感じじゃないんだよね」





[小鳥遊レイ]

「く、う……う……」



普段と変わらぬ軽い口調でタクミが問う。

あまりに軽すぎて、今の行為がやはり冗談以外の何物でもないことを改めて知った。



丹念にゆっくりと指に慣らされていく秘所は、それこそ冗談か何かのように微かな快楽すら訴える。



[小鳥遊レイ]

「……わ、からない」





[七瀬タクミ]
「え？」





[小鳥遊レイ]

「つめたいとか、……どうでもいい」



[七瀬タクミ]

「はあ、ほんとレイって……適當だよね」





[小鳥遊レイ]
「ん、あ！」





指を増やしてぐるりと搔き回され、今度は強い快感に思わずの声があがる。



想像以上に容易く悦ぶ身体に戸惑うも、かといって未だに抗う意思も起こらなかった。



[七瀬タクミ]

「この状況で適当って、レイも相当だよね」





[小鳥遊レイ]

「つふ、……う、くう……」



[七瀬タクミ]

「嫌って言わないし。イイとも言ってないけど」





[小鳥遊レイ]
「あ」





[七瀬タクミ]

「ね、でも身体はこんなに、ヨさそう」



[小鳥遊レイ]

「あ、あ……や、っああ！」





ぐっとナ力の一点を押される。浅い場所にある箇所を撫で
摩られれば今日一番の嬌声があがった。



何をされているのかはわからなかつたが、そこがイイ場所
であることはたつた今身体で知つた。



その機微がタクミにも伝わったのか、にんまりと笑って告げられる。



【七瀬タクミ】
「キモチイイ、んだよね？」





[小鳥遊レイ]

「つ、う……」



【七瀬タクミ】

「どうでもいいじゃなくて、イイって言ってみて」





[小鳥遊レイ]

「ん……き、もち、い……」



たどたどしく答えた瞬間、身体がずくんと疼くのを感じた。



言葉にすることで、自分がヨくなっている事実を殊更に自
覚する。



珍しくも自己の内に芽生えた感情が、まさか性的な欲求であるなんて。



[小鳥遊レイ]

「お、れ、ヨくなっ、てる……？」





【七瀬タクミ】

「そー。レイ、よく言えたね」



[小鳥遊レイ]
「ン！」





口にしてみれば洗脳されるかのように、思考が妄りがわしい実感で満たされる。



キモチイイ、ヨくなってる、こんなに、イイんだ。実際に
言わされることで、俺の答えはもしかすると誘導でもされ
ているのかも知れない。



【七瀬タクミ】

「じゃあもうちょっとイイコト、する？」





[小鳥遊レイ]
「いい、こと……」





【七瀬タクミ】
「わかるよね？」





にっこりと笑まれる。状況がわからないほどバカではない、
そのうえで俺の意志を問われている。



楽しげに笑うタクミが、状況に似合わない穏やかな調子で
言った。



【七瀬タクミ】

「したいって、レイから言ってよ」



こともなげな台詞。もとより意志を問われることは苦手で、普段であれば返答に窮しただろう。



それでも、先程から言葉で高められ、答えを誘導されてい
るような錯覚すら覚えていた俺は、そのまま鶲返しに答
えを戻した。



[小鳥遊レイ]
「……し……たい」





[七瀬タクミ]
「！」





素直に紡いだ俺に、タクミが一瞬だけ目を丸める。



けれどすぐに満足気に目を細め、指を引き抜いた代わりに怒張を宛がってくる。

これが自分の意志なのか、流された結果なのかはわからぬ
い。けれど。



[七瀬タクミ]

「いーこ。 良く出来ました」





【小鳥遊レイ】

「！ ん、う、つあ、ああ！」

子供を褒めるような調子で告げたタクミが、その声音とは
裏腹の熱情を以って、俺のナカへと腰を推し進めた。



耽美な鎖くさり



[小鳥遊レイ]

(まるで何もなかったみたいだ)



夜の街を歩くタクミを見ながらぼんやりと思う。

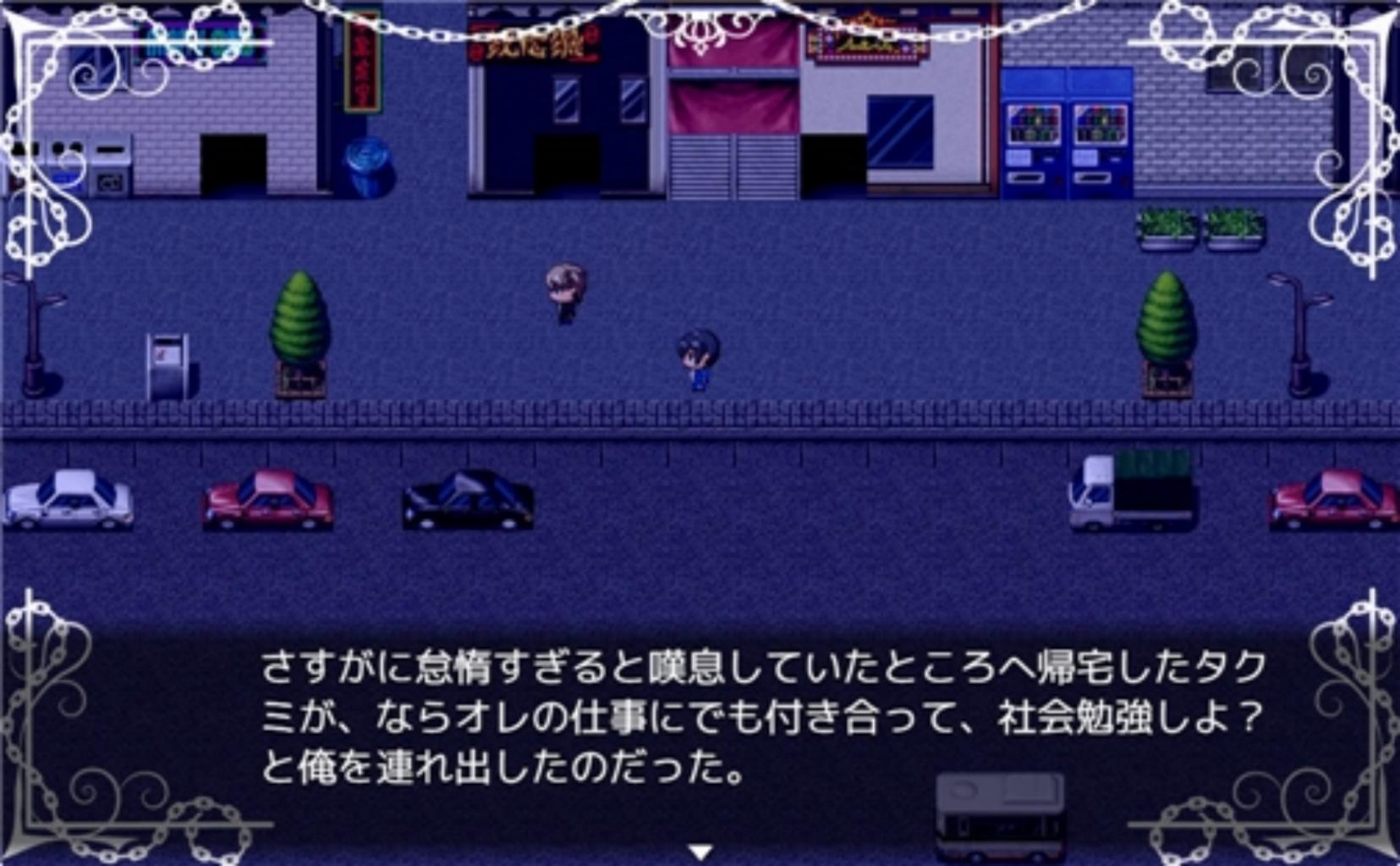
ゆうべ、あんなことがあったのに。夢だったのだろうかと思うも、僅かに怠い下半身が行為の跡を物語っていた。



[小鳥遊レイ]
(.....)



慣れぬ行為で疲れたのか、そのまま眠って目覚めた頃には
夕刻を過ぎていた。



さすがに怠惰すぎると嘆息していたところへ帰宅したタク
ミが、ならオレの仕事にでも付き合って、社会勉強しよ？
と俺を連れ出したのだった。



[七瀬タクミ]
「レイ？」



[小鳥遊レイ]

(これだけ普通なら、本当に冗談だったんだな)



[七瀬タクミ]

「おーい？ レイ、どしたの？」



[小鳥遊レイ]

(なら、俺も気にしなければいい。それだけのこと)



[七瀬タクミ]

「ねえちょっと！ レイってばあ！」



[小鳥遊レイ]
「うわっ！？」



[七瀬タクミ]

「うわ、じゃないし！ どうしちゃったの？」



[小鳥遊レイ]

「～～～な、なんでもない」



[七瀬タクミ]
「そう? ならいいけど、着いたよ」



[小鳥遊レイ]
「あ」



立ち止まり、視線を簡素な看板へと移す。



[小鳥遊レイ]
「『マグメル』？」





[七瀬タクミ]

「そ、昨日ローション使ったでしょ、アレ貰った店」





[小鳥遊レイ]
「！」





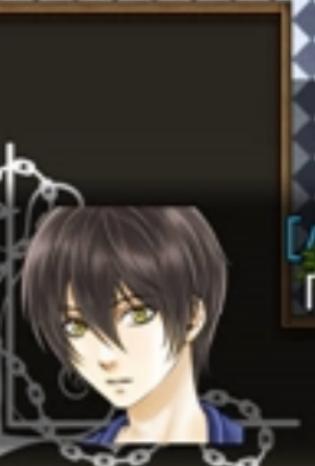
[七瀬タクミ]

「あはは、レイって割と顔に出るよね」



声をあげて笑ったタクミが、眼前の扉を開いて中の階段を上る。

慌てて付き従い、綺麗な、けれど狭い階段を一段づつ進んでいく、と。



[小鳥遊レイ]
「あ」





視界が開けた先、壁一面に張られた写真パネルが見て取れる。



注視すればそれらはすべて男性で、みな一様に媚態を作っていた。



[七瀬タクミ]

「びっくりした？ 男性風俗なんだ、ここ」



[小鳥遊レイ]

「みたいだな……」





[七瀬タクミ]

「言ったでしょ、レイの社会勉強だって」





タクミが悪戯っぽく目を細めたのち、フロントの脇にある扉をノックした。



ほどなくしてがちゃりと開き、店長らしき人物が顔を覗かせる。



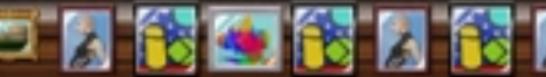
【店長】
「あ、タクミさん」





【七瀬タクミ】

「こんばんは。店長、ちょっと早かったっスか」





[店長]

「大丈夫ですよ」





にこりと、穏やかな笑みを浮かべた店長が俺たちに向けて会釈してきた。



その笑顔があまりにも普通で、俺は少したじろいでしまう。

店の雰囲気にそぐわない爽やかさに戸惑いつつも、とりあえずの平静を装った。



[小鳥遊レイ]
.....



▼



きよろりと見回せば、扉の向こうに小奇麗な応接室がちらりと覗く。



他愛のない立ち話を二、三交わしていたタクミが、それで
仕事の話apusけど、と切り出して先を続けた。



[七瀬タクミ]

「こないだ紹介したコ、どんな感じッスか？」



▼



[店長]

「逃げる一歩手前ですよ。だからタクミさんをお呼びした
んですがね」



▼



[七瀬タクミ]
「あー、そうなんスか」





[小鳥遊レイ]
「！」



▼



突然の物騒な台詞。ぎょっと目を見開けば、タクミが軽く視線を寄越して苦笑してくる。



そのまま会話に戻ったタクミは普段となんら変わらない調子で、しううがないッスね、自分から働くって決めたのにと肩を竦めた。



[七瀬タクミ]

「話、聞いてあげればいいんスよね」



▼



[店長]

「はい。呼んできます」





[小鳥遊レイ]

(え、俺もその話を聞くのか！？)



▼



社会勉強だと茶化されはしたが、正直なところ他人のごち
やごちゃには一切の興味がない。



そもそも俺がそこまで聞いていいものかとも思惑ってしまう。



[小鳥遊レイ]
「.....」





[七瀬タクミ]
「？」



▼



と、タクミがぱっと音を立てて噴き出して、ひょいと俺の
顔を覗き込んできた。



[七瀬タクミ]

「大丈夫。レイは別室に居てもらうつもり」





[小鳥遊レイ]
「そう、なのか？」





[七瀬タクミ]

「店長、キャストの待機部屋って借りられるっスか」



▼



[店長]

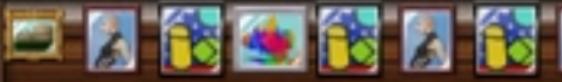
「大丈夫ですよ」





【七瀬タクミ】

「よかったです。レイ、それでいい？」





[小鳥遊レイ]
「え」



▼



てっきりそのまま話が進むと思っていれば、意思を確認されて困惑する。

了解も何もここに居るわけにもいかないのだろうと、そのままこくりと頷いた。



[店長]

「じゃあ、案内します」





相変わらず柔らかな笑みを湛えた店長が、俺に視線を送つたのち歩き出す。





俺もまた素直に付き従い、にこにこ、ひらひらと手を振る
タクミを横目に、行く先へと足を向けた。

耽美な鎖くさり





[男]

「タクミが？」





[店長]

「うん、話したいって」





[男]

「……わかった、行きます」





[店長]

「じゃあ、行こうか」





[小鳥遊レイ]
「.....」





[店長]

「では」







俺に向けてぺこりと一礼した店長が、男性を連れて出て行く。



残された俺はとりあえずと、手近な椅子を引いて腰を下ろした。



ぐるりと周囲へ視線を巡らせてみるも、どうにも身の置き所を測り兼ねてしまう。



[小鳥遊レイ]

(とはいえ、静かに待つしかない)





[男]

「なあなあ、コーヒー飲む？」





[小鳥遊レイ]
「！」





声のした方に顔を向ける。



部屋の隅で雑誌を読んでいる同年代ぐらいの男が、俺に向
けて訊いたようだった。



[男]

「オレがコーヒー入れるから、そのついで」



[小鳥遊レイ]

「あ、いや俺は」





[男]

「いらない？」





[小鳥遊レイ]
「あ……ああ」





[男]

「はい」



[小鳥遊レイ]
「っ」





馴れ馴れしい造り取りに少し身構えてしまう。



夜の街を軸にした生活を始めて一週間、タクミやエデンの人たちとの会話で、敬語抜きのやりとりにも慣れてきたと思っていた、のだが。



[男]

「面接？」



[小鳥遊レイ]
「え」





[男]

「なんか、アンタ不慣れな感じだから」



[小鳥遊レイ]

「あ、いや違う。連れの仕事に付いて来ただけで」





[男]

「ああ、タクミの連れかあ」



[小鳥遊レイ]
「！」





名を挙げてないのに言い当てられ、取り繕いも忘れて驚いてしまう。



そんなにびっくりするなよと声をあげて笑った男が、マグ
カップに満ちるコーヒーを揺らめかせて弄びながら続けた。



[男]

「ここのキャストはタクミの紹介が殆どだから、アイツのことなら知ってるって」



[小鳥遊レイ]
「あ、それで」





[男]

「さっき連れてかれた奴もそう。辞めたいとか零してたから、懐柔しにきたのかなあ」



[小鳥遊レイ]
「え」





懐柔、という物騒な言葉に再びぎょっとする。



説得でも説教でもない言葉の意味を測り兼ねていれば、男
が気怠げに先を続けた。



[男]

「だって、タクミはそういう奴でしょ」



[小鳥遊レイ]

「そういう、って」





[男]

「『沈めのタクミ』って、みんな呼んでる」



[小鳥遊レイ]
「え……」





呆けた声があがる。



意味のわからない呼び方。けれど何となく嫌な響きを覚えた俺は眉を顰めてしまう。



そんな俺を見た男もまた眉を下げたあと、気まずげに問うてきた。



[男]

「あ～……余計なこと言っちゃったあ？」



[小鳥遊レイ]

「とか……意味がわからない」





[男]

「ああ、言葉の意味？」





素直に首を縦に振る。



困ったなあと頬を搔いた男が、相変わらずの間延びした声
音で告げた。



[男]

「えーっと、見たことない？ 任侠映画なんかで、借金を抱えた子を風俗で働かせる話」



[小鳥遊レイ]
「あ」





[男]

「そういうのを『沈める』って言うの」



[小鳥遊レイ]
「.....」





[男]

「タクミは口が上手いだろ？ 人をこういう店で働かせたり、長く続くように世話するのが上手なんだ」



[小鳥遊レイ]

「くちが、うまい……」





呆然と眩いて繰り返す。



確かにそれは感じていた。人の内側にするすると入り込む距離の取り方、巧みな話術。



けれどそれは、言い方を変えればこんなにも下世話な響きになってしまうのか。



[男]

「あ、怒ったあ？」



[小鳥遊レイ]
「え」





[男]

「アイツのこと悪く言った！ みたいな顔してた」



[小鳥遊レイ]

「そんな顔……してたのか」





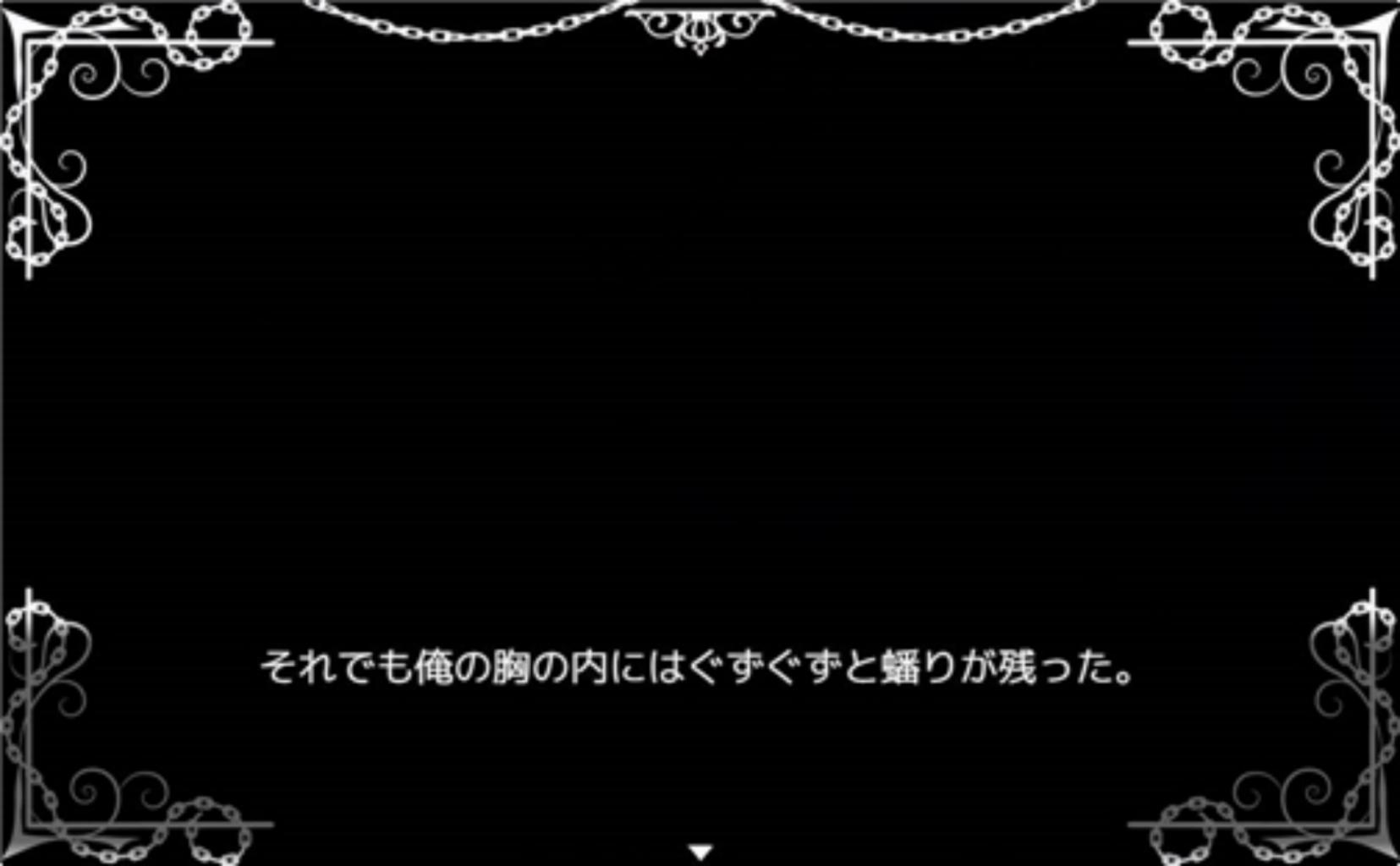
[男]

「してたよ～、ゴメンな」





悪口じゃないんだ、口が達者なのは尊敬してるよ、と笑
って会話を締め括られる。



それでも俺の胸の内にはぐずぐずと蟻りが残った。

自分のことすら適當なのに他人のことでモヤモヤするなんて、どうしたことだろう。



と。不意に、入口の扉ががちゃりと開いた。



[七瀬タクミ]

「レイ、お待たせ~」





[小鳥遊レイ]
「あ」





視線を遣れば、ここ最近すっかり馴染んだ……よく知った
快哉な笑顔で、ひらひらと手を振るタクミが立っていた。



[小鳥遊レイ]

「終わった、のか？」





[七瀬タクミ]

「ん。待たせちゃったね」





[小鳥遊レイ]

「仕事なんだろ。構わない」



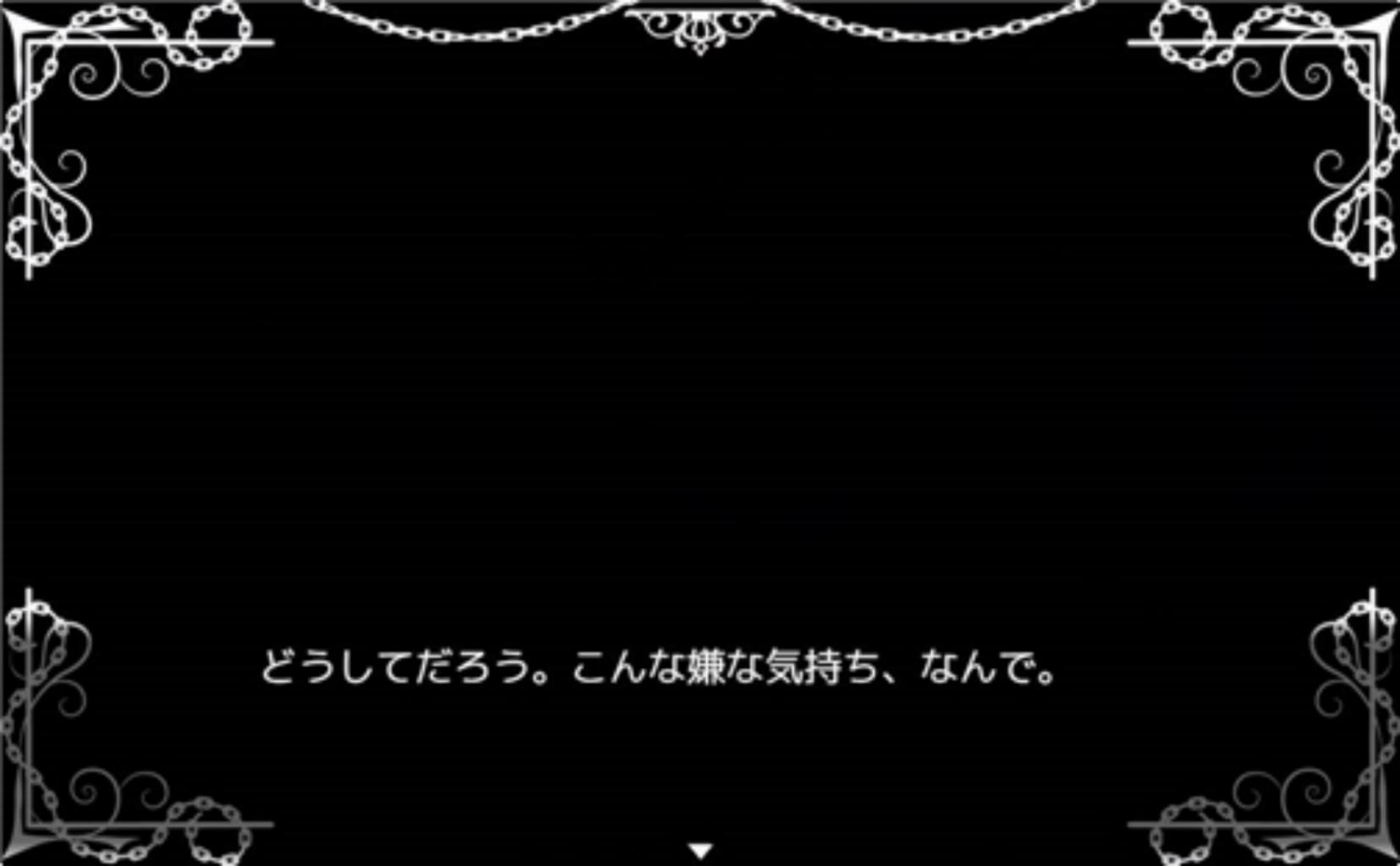


シゴト、という響きを口にしたとき、なぜか胸が少しだけ
キシリと痛んだ。



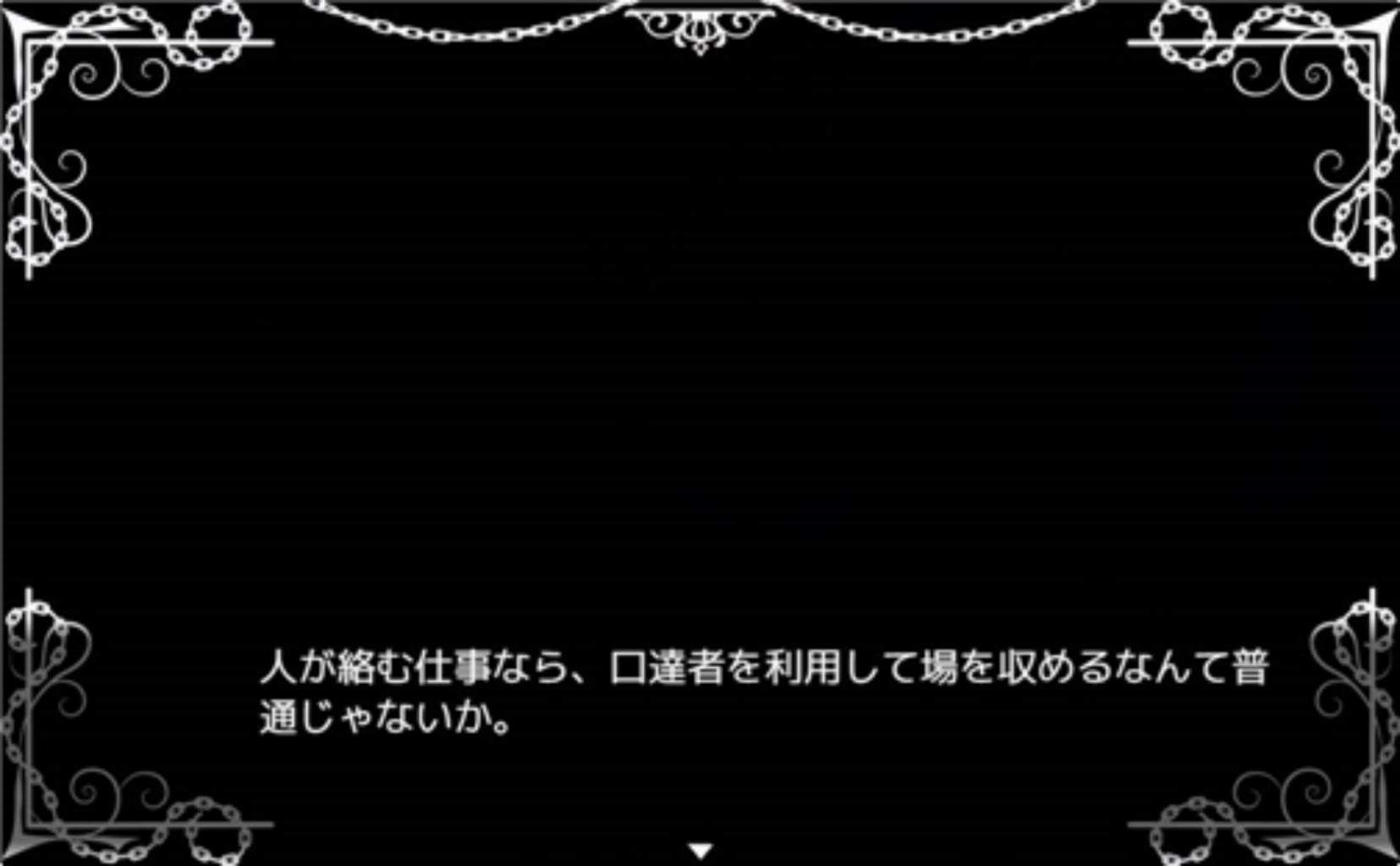
[小鳥遊レイ]
(.....?)





どうしてだろう。こんな嫌な気持ち、なんで。

けれどきっと、どうでもいいこと。



人が絡む仕事なら、口達者を利用して場を収めるなんて普通じゃないか。



[小鳥遊レイ]

(考えるな。きっとこれは、面倒だ)



ふるりと首を振り、行こう、と告げて立ち上がった。





男に軽い会釈をして退出を示し、踵を返してタクミに付き従う。

帰りにエデンでんかけチャーハン食べてかない？と楽しげに話しかけてくるタクミに、俺もまた柄にもなく楽しげな聲音を繕い、承諾を返した。

耽美な鎖くさり





延々と具材を皮で包み、ひたすらに閉じる。



ものも言わずに手作業を続けていれば、眼前的のショウゴが
はあ、と溜息を吐いた。



[時東ショウゴ]

「なあレイ、ちょっと雑談しねえか」





[小鳥遊レイ]
「話題がないんだ」





[時東ショウゴ]

「あー、じゃあ俺が話振ったら乗るか？」





[小鳥遊レイ]

「話を続けるのも不得意だ」



[時東ショウゴ]

「はああ……ほんっとオマエなあ」



よくそれで生きてこれたな、と呆れたように声をあげたショウゴが、手を動かしながら声だけを投げ続けた。



[時東ショウゴ]

「あのなレイ、これはバイトだろ、バイト」







[時東ショウゴ]

「ヨイチさんが今度は小龍包祭りだとか言い出して、オマエが日雇いで呼び出された。だよな？」



[小鳥遊レイ]
「それが、なんだ？」





[時東ショウゴ]

「手エ動かすだけがバイトかよって言いてえの」

憮然として唇を尖らせるショウゴだが、怒っているわけ
はなさそうだ。



きっと俺の非社会性を思い、心配しているのだろう。



心配、などという甘ったるい単語が脳裏を過ったことに自分で驚く。



タクミに構われすぎておかしくなったのだろうかと苦笑しながら、ふと、浮かんだ疑問をショウゴに投げかけた。



[小鳥遊レイ]
「ショウゴ」

[時東ショウゴ]

「お、世間話する気になったか？」



[小鳥遊レイ]
「でもないけど……その」





[時東ショウゴ]
「なんだ？」





いい奴なのか?
どんな奴なんだ?
悪い奴なのか?

[小鳥遊レイ]
「タクミ、って」



[小鳥遊レイ]
「いい奴、なのか？」





[時東ショウゴ]
「あン？」



唐突な質問に、軽く目を見開いたショウゴだが、ほどなくしてふっと笑みを見せて返してきた。



[時東ショウゴ]

「人のこと気にする頭あったんだな」





[小鳥遊レイ]
「え」

[時東ショウゴ]

「人付き合いなんかどうでもいい、ってタイプだと思ってたぜ」



[小鳥遊レイ]
「……あ」



そういえば、とはっとする。



誰がどんな奴かなんて、関心を持ったことなどなかった。



ふっと浮かんだ疑問ではあったが、居た堪れなくてかあつ
と頬が熱くなる。



話談が一旦途切れて沈黙が流れたのち、穏やかなショウゴの声が静かに届いた。



[時東ショウゴ]

「あいつはいい奴だ。俺はそう思ってるぜ」





[小鳥遊レイ]
「そう……なのか」





[時東ショウゴ]

「まあ、俺は自他共に認めるお人好し野郎だ。あくまで俺
ン中ではって話だがよ」



[小鳥遊レイ]
(お人好し野郎……)



[時東ショウゴ]

「おいテメエ、そこで笑うな」







[時東ショウゴ]

「ったくよ……まあ確かにタクミは職業柄もあってやたら
と世渡りが上手え。けど」



[小鳥遊レイ]
「けど？」

[時東ショウゴ]

「俺からしたら、人懐こくてちょこまか俺に絡んでくるア
イツを……悪い奴だと思えねえよ」





[時東ショウゴ]

「レイ、オマエだってそう思うんだろ？」





[小鳥遊レイ]
「え」



言われて、自分が抱いていたタクミへの感情に気付く。



俺みたいな無愛想な奴にでも構いかけてくる、明るくて元気なタクミ。



そんなタクミを、悪い奴じゃないって……俺も思っていた。



[時東ショウゴ]

「俺だってこのツラ見て怖えって言われることもありや、さっきみてえにお人好しつて笑われることもある」



[時東ショウゴ]

「誰がどんな奴だってのは、曖昧なもんだ。なら、もうオマエが思ったタクミが正解でいいんじゃねえのか？」



[小鳥遊レイ]
「俺が思った、タクミ？」









[時東ショウゴ]
「そんじゃ、っと」





俺の手から道具を奪ったショウゴが、にいと笑った。



[時東ショウゴ]

「そろそろ時間だろ。お疲れさん、手エ洗ってヨイチさん
に日払い貰ってきな」



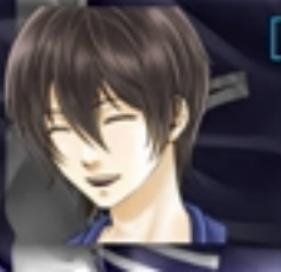
[小鳥遊レイ]

「わかった……ショウゴ、あの」



[時東ショウゴ]

「あ？」



[小鳥遊レイ]
「……ありがとう」

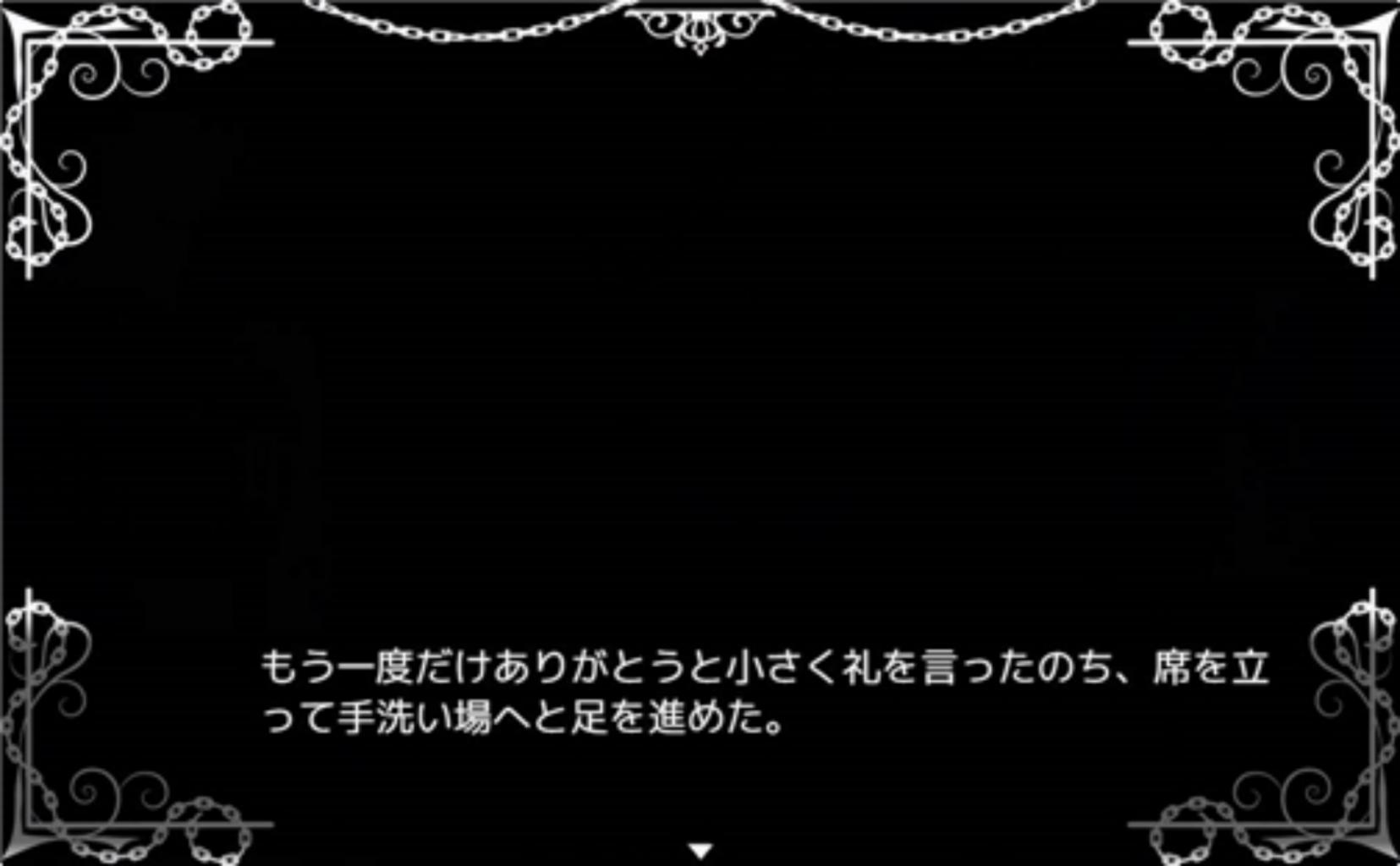




[時東ショウゴ]

「ほいほい。素直で結構、上等上等」

にまつと笑ったショウゴがひらひらと手を振り、俺の退席を促す。



もう一度だけありがとう小さく礼を言ったのち、席を立
って手洗い場へと足を進めた。

耽美な 心鎖

さり



[小鳥遊レイ]
(家を出るの、早かったかな)







軽やかな足取りで繁華街を歩く。



仕事が終わったらエデンで何か食べようとタクミに誘われていた。



俺は約束通りに家を出て、ひとり店へと向かっていた。



人並みをすり抜けながら自然と笑みが浮かぶ自分に驚いて
しまう。



他人と食事をするなんて、ずっと煩わしいだけだったのに。



[小鳥遊レイ]

(何を食べよう……何を話そう)



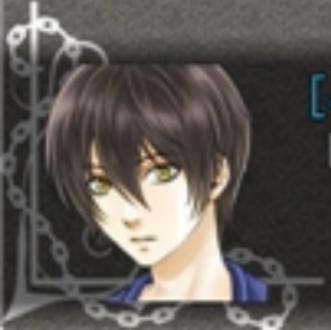




自然と歩が速まり、浮き足立つ。
と。



[? ?]
「危ない！」





どしん、と眼前の人物と衝突する。



転倒はしなかったが鼻をぶつけてしまい、うつと顔を齧め
てしまった。



[小鳥遊レイ]
「い、た……」



[??]

「大丈夫？ ……えっと、レイくん？」



[小鳥遊レイ]
「あ」



視線を上げれば見知った顔。あの風俗店……マグメルの
店長が、にこにこと微笑んでいた。



[小鳥遊レイ]
「す、みません……って、あれ」



[店長]
「え？」



[小鳥遊レイ]

「あの、どうして俺の名前を」





[店長]
「タクミさんから聞いてます」



[小鳥遊レイ]
「あ」



あのとき、俺の居ない所で俺の話でも出たのだろうか。



それならきっと、知っていて不思議はないのだろう。



話題を締め括って頭を下げ、踵を返そうとしたとき。



[店長]

「マグメルへ来る途中でしたか？」



[小鳥遊レイ]
「え？」





[店長]

「タクミさんにも言いましたが、うちはいつでも面接歓迎
ですよ」





[小鳥遊レイ]
「！」





どういうことかと、問いかけた言葉が喉奥で詰まる。



と、店長がちらと腕時計に視線を落とし、慌てた様子で謝罪してきた。



[店長]
「すみません、少し急いでて」





[小鳥遊レイ]
「あ」





[店長]

「もし店まで来るなら、一緒に」





[小鳥遊レイ]

「き、今日はその……タクミと待ち合わせで」





慌てて取り繕い、精一杯の平静を装って答える。





[小鳥遊レイ]
「は、い……」





[店長]
「わかりました。では、また」





手短に一礼した店長が人波に消えていく。



その姿を眺めながらも、ちっとも目の前がはっきりしなかった。



[小鳥遊レイ]

(面接……タクミにも言った……?)





店長の言葉が脳裏で回る。



[小鳥遊レイ]

(何の話だろう、だって、あの店は)





雑踏の中で足が竦んで、動けなくなってしまった。



タクミはお節介で、優しくて。



だから俺の勤め先でも探してくれていたのか。



けれど、けれどマグメルは、あの店は。



『沈めのタクミって、みんな呼んでる』



あの日聞いた言葉が、腹の奥でぐずぐずと燻った。

耽美な鎖くさり

